

小説

# 北 帰 行

大宮 純

—

東京都庁第一庁舎二階のロビーに着いたのは、岸三郎と会う約束の時間より三十分ほど早かった。彼とは、久しぶりの再会だ。私は、癌に冒されて長期の療養生活を送っていたが、妻の献身的な介護で大分回復し、彼と会うために上京したのだ。職場で起きた危機を切り抜かれたのは、金融犯罪と情報機器に詳しい岸の力が大きかった。今日は、その御礼の意味もある。

四十五階の展望室へ直行するエレベータの前に視線を送ると、乗り合いを待つ客が五、六人並んでいた。十五年前の秋、仕事で上京した際、他県と同僚たちとこのエレベ

ータに乗ったのだが、その先のこととは良く覚えていない。ドアが開くと、案内係員が乗客へ向かって声をかけ、頭を下げたあと手でどうぞと中へ進ませる。その繰り返しを見ているうちに、脳裏へ強く刻まれた過去へと記憶が遡って行った。

四十九歳と六か月目を迎えた、夏の終わり。

腰椎椎間板ヘルニアに冒され、摘出術を待っている入院中の私の下へ、北日本中小企業協会の専務理事・兼有限会社の専務代行と二人の会計担当職員、顧問税理士がやってきて、“重大な問題が起きた。最終判断を仰ぎたい”と

いう。ナースセンターを通じて主治医の“面会室で三十分の間のみ”との了解を得て、場所を変えての面談となった。機密保持の理由で、会計担当職員には席を外してもらった。

専務理事代行職の青井ツキ子が、

「塚本猛専務理事。実は、一般会計で大きな赤字が出ました。このまま定時総会へは出せないと考えられます。ついでには、有限会社の赤字として計上し、報告することを了承していただけませんかしょうか」

という。一般会計の処理をチェックする役目と、有限会社の会計を担当する大田幸蔵は来なかった。

「大田君の二重チェックは受けたのか」

と代行へ訊いた。

「活動報告と活動方針案を書くだけでも大変。忙しくて、そんな時間がないんですよ。総会前の理事会は明後日に控えていますからね」

ざっくばらんに話してくれたいつもとは、大分距離感のある答え方だ。

「入院する前に篠村君から報告を受けたときは、大きな赤字は出なかったぞ。チェック出来ていないなら総会を二週間延期した方がいい」

と指示した。篠村亮介は一般会計を担当している。

「それは不可能です。もう案内状を出しましたから。……チェックしたって同じ結論が出るだけです。……そうですね」

と言って、脇で二日酔いらしい表情の税理士へ顔をちらつと向けた。

「本当にそうですか。先生」

顧問税理士へ尋ねた。

「……プリントされたものを見る限り、赤字は本当ですね。細道捜査網の開発費と、それに関わる人件費が当初よりも倍加したのが、主原因です。それと手数料収入の大幅な減少ですね」

酒焼き顔の相手が答える。「細道捜査網」とは、協会と有限会社とが共同でN通信社へ依頼して開発した、コンピュータによる高速の組織・共済・会計の管理自動処理システムのことだ。

「開発費が倍加したこと自体がおかしいが、止むを得ないから有限会社と折半で経費に算入してください。いずれ、開発したソフトは高い値段で売り出せます。しかし、一か月間で四桁も増えるのは、理解できませんね」

突っぱねた。

「うーん。そういう考え方もありますね。……その判断

は、青井さんに任せてもらえませんか。私も昨日から泊まり込みでやってはいるんですけども。なにせ、時間が切迫していますから……」

税理士は困惑気味だ。

「少なくとも財務局長と理事長に対しては、赤字決算となった理由について十分納得していただけるようにしてくださいませんか。宜しくお願いします」

「は、……なんとかやつては見ます。担当の方には、もっと早く資料のご用意をお願いしたかったのですが、コンピュータ会計に慣れていないようでした」

相手は眉間の筋を深くし、唇を噛んでいる。

「本当は、這ってでも出て来ていただきたいくらい困っているんです。そう言っていられないから、私の責任で乗り切りますよ。すぐ決断が出来ないなんて、呆れた人ですね…… 帰りましょう。先生」

「は、……まずは、お身体を大事にしてください」

と応じて税理士がべこりと頭を下げた。彼女たちが帰って行ったあと、いったん病室に戻り、鞆から携帯電話を取り出して、入院患者専用の食堂へ入った。携帯電話で大田へ事実確認を取ると、

「青井さんと篠村君たちは、なぜかぼくには一切書類を見

せてくれないんですよ。困りました。でも、赤字は本当です。開発費などが膨らんだので」

「おい、おい、今年度一般会計の赤字は、多くとも五百の予想だったじゃないか。それが、三倍に膨らんでいるぞ。年度末の一月間での急増は、どう考えてもおかしいよ」

大田の意外な答えに、腹が立った。

「すみません。どうしたらいいでしょうか。協会から有限会社へ支払われる共済手数料の大幅減少だけは、納得がいきませんし……」

彼も、このままではいけないと考えたようだ。

「いま、コンピュータ操作室の細道捜査網は起動されていますか」

「はい。日中は、電源を落としていますから。……それが、なにか」

怪訝そうに訊き返した。

「退院したら、赤字決算の内容を検証したいと思うんだ。これから話す事項を内々で迅速にやって欲しい」

と切り出して、青井たちが戻るまでの三十分以内に、コンピュータに入っている会員名簿と一般会計、特別資産の基金、共済会計と有限会社会計のデータをファイルに保存し、後日、操作マニュアルのコピーと一緒に機密扱い

で私の家へ届けるように指示した。

「なるほどね。良い方法だと思います」

腰椎椎間板ヘルニアは思ったよりも重傷で、復帰まで六か月間の入院となった。手術前に行われたCTとMRIの検査で、脊髄に注入された造影剤の副作用が中々おさまらず長引いたのだ。この間に総会が開催され、一般会計の決算書は承認された。共済会計と有限会社の会計は、承認案件ではないこともあって、赤字問題の詳しい検証は行われていなかった。

退院した後、事務室へ出勤する当日の朝、携帯電話へ青井から電話がかかって来た。

「打ち合わせしたいことがあるので、出勤前に会っていただけませんかでしょうか」

というのだ。事務室が入っているビルの隣にある喫茶店で話を聞くことにした。

「塚本さんは、針の筵ですよ。協会の専務理事と有限会社の専務を交代して、この私を指名してください。でないとな事務室の多数派はあなたの指示を受けませんからね」

相手は、席に着くなり勝ち誇ったよつな話し方だ。僅か半年の間に、それまでの信頼関係を損いかねない態度だ。「なんですか。二十年もの間、一緒に働いてきた同僚とし

てひどい言い方だぞ。赤字を出した責任を取るのはいいいけど、専務理事を指名するのは理事会の権限に属することだし、有限会社の専務は取締役会の専権事項だべ。第一、体調の優れない貴女には重荷ですよ」

いつもの調子で喋った。

「相変わらず品がないのね。生まれつきだから直しようがないけど、その泥臭いところが、昔は良いと思ったけれど、……今は大嫌いですわ。腰を切られた塚本さんのためにも、頑張るつもりです」

ハンドバッグから取り出したブランドものの花柄のハンカチを広げて、わざとらしく口と鼻を覆っている。彼女がブランド品を使っているのを見たのは初めてだ。

「ところで、役員の誰が専務理事の交代を要求しているんだい」

「さあ。ご自分でお調べになったらいかがですか。ホホホ。天下は私の掌にありますわよ」

俄かには信じられないことだが、いつの間にか彼女は変質し、役員の多数が私への敵対派を形成しているらしい。「意見としてだけ聞いておくが、即答は出来かねる。もう、この話は終わりだ」

「あらま、切り替えの早いことですよ。馬鹿ね」

職場への復帰後も体調は思わしくなく、半日勤務した後、整形外科医院でマッサージと温熱療法を受けるという日々が続いた。青井と篠村たちは、要求運動と組織拡大に関する指示などを悉く拒否する一方、残業と称して、細道捜査網をあれこれと操作していた。運動と拡大が進まないのでは、組織として致命的な欠陥になる。事務室の指揮命令系統は完全に麻痺した。

間もなく、事務室の機能低下が表面化した。理事会に提出する月例議案のうち、一般会計報告書が計算間違いを起こし、会議の最中に差し替えるという失態が起きたのだ。事務室の打ち合わせで、

「何をやっているんだ。会計をしつかりやれ」

我慢の尾が切れて、篠村を一喝した。

「専務理事。独断専横が過ぎます。私たちは、毎日、毎日、深夜まで残業して、総会を乗り切ったんですよ。本来なら責任を取って辞職すべきだったのに。……よくもそんなことが言えるのね」

と青井が涙声で訴える。

「そつですよ。大変だったんですから」

共済会計担当の紺野智子も口を尖がらせる。

「ぼ、ぼくの事務能力が劣っているから、み、みなさんに

堪り兼ねて青井が自配せした。

「この問題については、あとで二人から事情を聴きます。ちよつと、相談することがあるので席を外すが、何か急用があったら携帯へ電話してください」

と事務室の全員に指示して部屋の外へ出た。青井を連れてエレベータで一階に下り、ビルの隣にある喫茶店「ボア」へ入った。

「コーヒーを二つ」

ウェイトレスへ注文した。

「で、話つてえのは何かな。手短かに話してくれないか」  
どつせ、専務理事の交代を急かせたいのだからと思つた。

「以前から申し上げているように、事務室内でいじめがあるんですよ。その問題を根本から解決しない専務が全て悪いんです」

と彼女は涙目だ。尖った耳が細かく痙攣し唇が震えている。いじめとは、大田が損害保険の募集活動に不熱心な紺野智子を、きつく指導し反発を招いた事件を指している。「その件については、本人が謝罪して終わっただんじやないか。こうなったら直ぐに、赤字決算の検証はやらせて貰います。そこに間違いの原因があると考えているんだ」

「ご迷惑をおかけしました。み、みんな、ぼ、ぼくのせいです。で、でも、専務理事の言い方はきつく感じます」  
パーマを施して長い髪を背まで垂らした篠村が遠慮がちな小声で発言した。彼は、組織管理と一般会計の実務の他に、共済会計の送金業務をも担当している。

「私は、みなさんと違ってそう思いませんがね。チェック出来なかったのは、言い訳になります。試算表を担当者の篠村君が会議の直前まで、いくら頼んでも見せてくれなからです」

辛うじて大田が攻撃に加わらないだけで。他の職員は激しいやり取りを聞いて、目を白黒させている。

「なんだとお、見せないというのはどういうことだ」

月次決算書の差し替え問題は初歩的な単純計算のミスではなく、一種の作為を感じさせるものがある。

「は、は、あ、あの、それはですね。えーっと、……。ぜ、前月の繰越金が、と、当初の見込みとが違いましたので、そ、その……」

篠村は汗を垂らしながら、答えに窮している。コンピュータが計算間違いを起こすはずがない。何か出鱈目なことをしているのではないか、と疑念を感じた。

「専務理事。……外で、ちよつとお話があります」

「ホホホ。でしたら、私が再指導しますわ。既に終わったものの検証よりも、ご自分の置かれた状況を認識してはいかが」

取り出した花柄のハンカチへ、首を出しながら鼻水を嘔んで、皮肉っぽい鍵鼻の顔を見せた。

「勝手なことをやっちゃだめですよ。兎に角ね。篠村君には、赤字決算書の詳しいデータをプリントしてもらいますからね。話は終わりだ」

伝票を手に掴み、腹を堪えて席を立った。

（まだいじめが続いているのか。検証するまでもなく、前年度の大きな赤字は本当だったのかも。青井たちと、顧問税理士が嘘をつくわけもない）

（組織は、県内での政治的・社会的な影響力を持つまで大きくなったし、細道捜査網を完成したから、組織と財務の管理は完全なものとなった）

（身体は術後の後遺症でつらい。家族も心配している。こうなれば、専務理事を辞任して新しい体制を作るのが正しかろう）

と弱気になった。事務室に戻ると、すぐに大田と篠村を会議室に呼び出し、二人から、今回の月次決算書を作った際の経緯について詳しく質した。

「要するに、篠村君はコンピューター会計に不慣れだし、ちっとも相談してくれません。私は、その他の業務に手が取られやんした」

と大田が弁明した。

「は、は、い、いえ。ほ、ぼくが、わ、悪いんです」

篠村は、汗だくになっていてるだけで答えにならない。

「篠村君、もしかして、業務が多すぎるんじゃないのか。出来ないのなら無理しなくてもいいぞ。休業補償は、おれが引き受けてやるつか」

と水を向けた。休業補償は、会員が疾病や事故で仕事を休んだ場合に給付される自家共済制度のことである。

「は、は、あ、あの。だ、大丈夫です。……ほ、……ぼくがやれると思います」

長い髪の下にある顔の黒縁の眼鏡にしきりと指を差して、曖昧な返事だ。

「休業補償の任務の件は、後日、みんなで相談しようか。新体制が出来たら、任務変えも行われるだろう」

「えっ。専務理事を下りられるんですか」

大田は、驚きを隠せない。

「は、は、……あ、あの。ほ、ぼくがミスしたばかりにも、申し訳ございません」

「細道捜査網で昨年度の決算に関わるデータを打ち出してくれ。あとで検証させてもらう」

と篠村へ指示した。

「は、えと、えーと。……そ、それは、い、急がなくてもいいかと思われませんが」

彼は素直に受け入れない。

「でしたらね。明日でも構いません。コンピューターへ記憶させて置くだけでは、決着がつかないからさ。有限会社の取締役会だって、気を揉んでいるよ」

「は、……は、あ、あのう。わ、……分かりました」

難しい作業でもないのに、なぜか彼は汗びっしょりになっている。

夜に開かれた三役会議で専務理事辞任の申し出をする

と、

「言わせてもらいますけれども、塚本君の場合は専務理事への復帰を前提にした辞任なら賛成する。後任の適任者は、残念ながら事務室内に見当たらないね」

と若手の副理事長が意見を述べ、理事長と三名の副理事長も頷いた。

赤字を出した道義的責任もあるしね」

一人の若手副理事長が、気難しげに意見を述べた。

「辞任するけれども、いままで通り出来るだけの仕事はしますから、意を汲んでいただきたい。青井ツキ子さんが、ぜひ自分にやらせてほしいとのことだ」

本日は、前年度の一般会計と有限会社の決算報告書自体に疑問があるし、後任には、壮健な大田幸蔵が適格だと言いたかった。

「塚本さんがそう言うのであれば、致し方ないではないですかあ。復帰できるかどうかは別にして、好きなようにさせたらいかがですかあ」

とそれまで殆ど自分の意見を述べなかった副理事長が、ぼそつと言った。

二

青井を頂点にした新しい事務室体制が始まって間もなく、大田と二人の女性職員が新体制にいやげが指して退職した。大田が担っていた分野と有限会社の運営業務が私に振り分けられ、篠村の会計を二重チェックする役目は青井に変わった。臨時職員で事務室体制が補強されたものの、人手不足でコンピューターから打ち出された赤字決算書のチェックが後回しになり、ビルの十階にある倉庫へ保管さ

れた。専務理事兼有限会社専務の青井は、学術と総務、渉外だけを担い、政策と理論活動、要求運動と起業支援、税務経営、組織拡大と広報の任務を私へ押し付け、朝から事務室へ顔を出さずに“役員のところへ行ってくる。会計で困ったことがあったら携帯へ連絡してくれ”と篠村へ電子メールで告げて、夕方まで戻らず、夜だけ働くという身勝手な行動をとった。副理事長の複数から“青井専務理事は、いつも不在で困る。連絡したくても行方がはつきりしない。塚本君を専務理事に再登用すべし”の声が吹き上がった。緊急に三役会議で事態打開の協議が行われた。年配の副理事長から“塚本さんも会議に出て欲しい”と強い要請があり、途中から私も同席した。

「専務理事をころころと変えるわけにはいかんべえ」

青井と懇意の副理事長が同意せず、

「中を取って、塚本さんには、専務副理事になってもらってはいかがでしょうか」

若手の副理事長が事態を収めようとした。これに対して、青井は涙を交えて異を唱えたが、過半数の同意を得られなかった。

三役会議の翌朝。珍しく定時に出勤した青井が、

私は承諾しません。理事会であなたの人事を邪魔します。いいですかみなさん、事務室の最高権力は私です」

と、事務室の全員に厚顔無恥をさらけ出した。

「どの役員のところへ、いつ、何の用事で行ったのかはつきり喋ったらいいでしよう。それも出来ないで、当たり前散らされても困る。体調が優れないなら優れないと正直に申し出て、休みを取れば済みますよ。策略とは無縁だ」

腹が立つのを堪えて突っぱねた。

「一人で友誼団体へ就任の挨拶に回りました。役員とは個別に会って意見を聞いています。本来ならば、塚本さんが一緒に行って、私を紹介してくれるのが筋でしょう。分かってください。みんなもズル休みしていると、私を疑っているんでしょう。……もう、ひどい」

と泣き落としに出た。

理事会の決定により“協会と有限会社の専務副理事に塚本猛氏を任命する”の辞令を受けて、青井の不在時に組織・共済会計のチェックを担った。細道捜査網で打ち出された書類を点検し、月末の支払い業務をチェックしていく過程で、「これは何だ」という疑問が浮かんだ。月末の支払いに充てる共済会計の財務に不足金が生まれている。共

済会計は、当座預金とその殆どを占めている。会員から預

かった共済掛け金から手数料を差し引いて残った保険料を保険会社へ送金すること、協会と有限会社へ手数料を移管するだけの単純な会計である。ざっと見たところ、保険会社からの請求書に見合っただけの掛け金が収納されていない

「ちょっと、こちらへ来てください」

紺野智子を手招きした。

「は、はい。……何か」

「銀行から送られてくる保険料の口座振替結果通知書を揃えて、運んできてください」

そう指示すると、色白でつけまつげをした無表情の顔が不安そうに青ざめた、手の親指と人差し指の爪先をせわしなく擦り合わせている。手は、台所へ一度も立ったことがないような白さだ。

「は、はい。手が空きましたら持つてまいります」

そう答えて引き下がった。

妙なことに紺野は篠村と目で何か合図していた。私が急いでいるのを分かっているが指示を無視し、昼が過ぎても別の仕事を続けている。中々出勤して来ない青井へ、携帯電話で連絡を取り、午前中に気が付いた疑問について

報告し“口座振替結果通知書の調査を開始する”旨を伝え

た。

青井は、  
「そんな小さなことを。ま、……お好きなようにやってください」

と蚊の鳴くような声だ。暗い空間の床にでも臥しているようだった。

「ちょっと。紺野さん。早く持って来てください」

きつく指示した。

「は、はい。た、ただいま」

腰を抜かささんばかりに狼狽しながら、彼女が移動式の書棚から、書類を両手に抱いて運んできた。

「二十二銀行分しかないね。あとの銀行は、どうしたの。大所の物が欠けていますよ」

と訊いた。

「は、はい。それは……そのう」

当惑した表情で、彼女は後ろを振り返る。振り返った先を見ると、篠村が汗だくとなって、長い髪を手でぐしゃぐしゃに掻き上げていた。

「急いでください。何も難しいことではないですよ」

と命じて、二十二銀行分の書類を点検した。僅か一か

月分だけで、二十五件の未収金が生じている。

「紺野さん。今年度分の書類を全部持つて来てください。

いま、すぐにここへ」

甲高い声で命じた。他の職員は何ことが起きたのか、という塩梅で目を瞠っている。

「あ、のう。申し訳ございません。三銀行の書類が見当たりません。彼が……」

と答えて彼女は篠村を振り返り、再び目配せしている。篠村が突然、洒落たハンドバッグから携帯電話を手に取り事務室の外へ早足で出て行った。

「それは、彼が戻ったら探してもらえばいい。まず、二十二銀行の今年度分をここに持つて来てください。すぐにね。他の仕事より優先してください」

いまにも卒倒してしまいそうな相手を睨んだ。

「は、はい。分かりました。あ、のう。……青井専務理事は、いつ事務室に戻ってこられるのでしょうか」

彼女は、青井の助けを得ようとしている。

「分かりません。調査する件の承諾は貰ってあるから、早くやってくださいませんか」

「でも……。彼でないと……」

そこへ、鱧皮のバッグを腕に下げた青井が懺然とした

表情で事務室に入ってきた。彼女の後ろへ篠村が、うなだれた格好で従っている。青井は行動予定表に書いてあった自分の欄から「役員回り」の文字を消して、事務室の奥に設けられている自席へ、でんと身体を乗つけた。行動予定表用のボードは、青井が独断で購入し掲げたもので、他の職員は誰も使っていない。

「ちよっと、共済会計の担当者二人い。至急、こっちへ」

と篠村と紺野を呼んだ。

「は、はい。ただいま参りませう」

紺野は、嬉しそうな声を上げて顔を綻ばせ、小走りで見守っていく。その後ろから、篠村がちょこまかといっていく。ブラインドが天上から降るされ、その向こう側から、二人を激しくなじる青井のヒステリックな声が聴こえてきた。ブラインドも、青井が事務室内の合意を得ずに篠村へ独断で命じて購入させ、設えたものだ。

「いったい、あなたたちは誰のお蔭で給料を貰えるの。私がフォローしてあげているからでしょう。塚本さんの復権を許したら、大変よ。へまじやがって」

と恐るべき言動だ。「一体、へまとは何のことだ」と思った。二人がブラインドの横から出て席に着いた。

「つ、塚本さん。せ、専務理事がお呼びですよ」

へ向けて忙しく振った。

“馬鹿にするのもいい加減してくれ”と言いつ返し、いのを我慢して、席に戻った。会員から、改正されたばかり法律の解釈に関して矢継ぎ早に質問の電話がかかってくる。全日本中小企業協会連合会が発行した「改定ポイント」をもとに回答する。新体制に嫌気が差して大田などが辞めたいま、質問に答えられるのは私しか残っていない。青井は、法律の基本すらまだ理解できないのだから、対応したくとも出来ないのだ。

紺野は、淡々とした表情で別の仕事をやり、三銀行分の書類を探し出して運ぶこともなく、退勤していった。篠村は、再び青井に呼ばれて叱られている。

「……先日、事務室の勉強会で任務の大切さを学んだでしょう。頓珍漢ではしゃいでいたのは嘘だったの。身銭を切ったのに」

という小言がブラインド越に聴こえる。「頓珍漢」とは、万町にある居酒屋のことだ。大田が退職した後、躁状態に浮かれた青井が主導して、隣県の中小企業協会から事務室の幹部を招き、「事務室の民主的運営と政策理論活動の発展」と題する勉強会を開いた。話された中身は時宜に叶ったもので、参加者は満足し意気軒昂となった。

と篠村が告げた。出入りに邪魔くさいブラインドを手で払いながら奥へ入り、要件を訊いた。

「塚本さんね。あんまり、きついやり方で調査をしないでください。二人が萎縮していますよ。これ以上、職員が辞めたら仕事にならないでしょう」

と、いい加減な指示だ。

「事実関係をはつきりさせるのが目的で、これは仕事上の基本原則ですよ」

彼女の間違った考えを批判した。

「すでに、お好きなようにやってくさいと申し上げました。犯罪者を出すようなマネはしてほしくない。塚本さんは、ご自分の名誉回復を狙ってばかりおられる」

真実の究明よりも、自分の地位保持が先らしい。

「ばかなことを仰いますね。真実を確かめて、解決していくのが目的ですよ。それが人の道でしょう。赤字決算書のチェックも早くさせてください」

犯罪と人権との区別がつかないのか、と疑った。

「ホホホ、……ご立派なこと。正論を吐いても、一度失った信用はもとに戻りません。その見本が塚本さんでしょう。赤字の検証なんか、後でもいいから。まず、仕事して」

そう答えて、消しゴムの屑でも払うように手を私の顔

勉強会が終わった足で居酒屋を二軒回った。会費制にしては安いな、と思った。二か所で支払った会費は五千円に満たなかったのだ。ブラインド越の話から察すると、不足分を全部、青井が支払ったらしい。

「は、はい。」「ご負担を、お、お掛けして、す、すみません」

篠村は汗だくなっているようだ。

「コントラパスを買うお金があるなんて知らなかったわ。舞台の奥に隠していたなんて、……何か悪いことをやっているんじゃない」

「い、いえ。そ、そんなことは有りません。ぜ、絶対に。

お、お金は、……な、ない」

へどもどしているのが、眼に見えるような答え方だ。

「役員から、篠村君は金髪の女を連れて赤いスポーツカーを乗り回しているって話を聞いたけど、それ、ホントなの。あ、失礼」

「ぐちんと鼻水をかむ音が言葉の尾についた。

「あ、あの。そ、それは、……」

えっ、とびつくりした。スポーツカーを持っていることは、初めて聞いたからだ。

「……馬鹿ね。北日本八幡宮に参拝し、三人で誓った固い約

束を破る気なの。しっかりしてくれないと、私は夜も眠れない」  
「う、ご心配を、お、お掛けしました。な、なんとか乗り切ってみます」

なんのことやら、さっぱりわからない会話であった。青井に散々油を搾られ、げっそりとした顔で篠村が席へ戻った。

「つ、塚本さん。せ、専務理事が、お、呼びです」  
(またか……。仕方もない奴だ)

とげんなりしつつ、ブラインドの奥へ入った。

「明日は、財務局長へ、現状の報告に行きます。夕方には戻りますから、留守中の監督を頼みます。と言っても、そのくたびれた身体では、無理かもねエ。オホホホ」

言葉の終わりは皮肉がたっぷりだ。

「分かりました。今日は、この辺でお先に失礼します」

自席へ戻り、帰り支度を整えタイムカードを押した。

ふっと気になり、青井のタイムカードを覗いた。出勤時刻は空欄で、退勤時刻だけが印字されている。あっと驚いた。退勤時間が毎日のように深夜となっていたからだ。

朝の事務室会議で篠村と紺野へ指示した。

「三銀行の口座振替結果通知書を探す間に、その分をコンピューターで打ち出してくれませんか」

「あのお……。青井専務理事さんの了解を得ていらっしやるんでしょっか」

と紺野が訊いた。つけまつげの目をぱちくりとさせ、親指と人差し指の爪先をせわしなく擦り合わせている。

「ぼ、ぼくは……。今日、請求書を作って銀行へ送る、さ、作業が、い、急ぎであります」

そう言い訳して、篠村は長い髪を手で掻き揚げ、黒縁の眼鏡を人差し指でしきりと上げている。

「請求書は打ち出したあとに作ればいい。他の職員の方々は、請求書を詰めた封筒を各銀行へ直接運んで行ってください」

これ以上、ごまかしには応じられない。

「は、はあ……」

篠村と紺野は目で合図を交わし、急にしょげ込んだ。

会員から、ひつきりなしに掛かってくる様々な相談の電話と起業の打ち合わせに訪れる会員に対応しながら、コンピューターで打ち出され机の上に運ばれた三銀行の口座振替結果を点検した。三行を合わせて一か月の間に振替不能になっているものは、約百五十件分にあつてた。プリン

トされている事項を万遍なくチェックすると、前月の振替不能残高も同数である。  
「ちよっと、こちらへ来てください」

紺野を呼んだ。

「あ、はい」

勘違いしたらしく、篠村が肩をぴくりと動かして、呼ばれた紺野と同時に立ち上がった。

「ついでだから、椅子を持って、二人とも一緒にここへ」と指示して、席の横を指した。

「協会が個人に送った通知書の控えをすぐに運んできて下さい」

畳み掛けた。

「は、何か不審な点でもあるのでしょうか。青井専務理事のご承認をいただかないと、見せられません」

紺野は、眼を大きく見開き、爪を忙しげにかちかちと鳴らしている。

「了解は取っておりますよ。振替不能分を併徴しているかどうか、間違いがないか調べさせていただきます」

感じたままを話した。併徴とは、口座振替不能分を翌月の振替時に加算して口座から引き落とすことを指す用語だ。

「そ、それは……。私は一切タッチしておりませんから、篠村さんに答えていただきます。わ、私の責任ではございません」

紺野は、そう答えて横を見た。紺野と並んでいる篠村は、長い髪をぐしゃぐしゃに掻き揚げ、黒縁の眼鏡の奥で暗い眼を光らせ、顎まで汗を垂らしている。

「え、えーと。その……。す、すみません。た、確かに。ま、間違いもあるかと思われます。そ、それは」

訳の分からない返事だ。

「あのお。私が確認するから、併徴兼振込案内通知書の控えと併徴の結果も、すぐここへ持ってきてください」

思わず声を大きくした。

「は、は。……。え、えーと」

私たちの会話を聞いて、他の職員がラックから併徴兼振込案内通知書の控を運んできた。

ひつきりなしに掛かってくる法律改正・通達への質問と、税務経営の問い合わせに答えつつ、帳簿類を点検する。併徴兼振込案内通知書を出したあと、銀行振込で回収しているのは僅かしかない。回収できなかった分は併徴する仕組みになっているはずだ。おかしいなと考えて、備え付けであるコンピューターシステム操作の手順書を読んだ。コ

ンピューターへ手作業で振込の文字を入力すると、翌月の振替請求で併徴されないようになっていた。当座勘定照合表に連動しているから、誤魔化しようはない。「あれえー」と思った。振込で回収されていないのにも拘らず、併徴すべき額が翌月の請求に加算されていないのだ。

「ちょっと、こちらへ来てください」

三

二人を呼んだ。

「併徴されていないのはなぜですか」

きついで訊いた。

「は。……はい。そ、それは篠村さんが」

「……えーと、えーと」

二人ともおろおろして、要領が得ない。

「これは、どういふ事ですか。事実を確かめますので、昨日からお願ひしている、大手銀行三行の原本の口座振替結果通知書を、すぐここへ持って来なさい」

強い口調で命令した。

「え、えーと。そ、その……。は、は。……お、お持ちしますよ。い、忙しいのに、し、仕方がないなあ」

篠村が言葉尻を荒げ、汗だくとなって移動式書庫から三行の口座振替結果通知書を運んで来た。通知書を点検し

てびっくり仰天した。揃っていない物が多数ある上に、残っている通知書の振替結果欄の一部が白く塗りつぶされている。斜線を引いて“脱退処理済”のメモが貼ってあるものまである。書類を点検している間中、二人は棒のように突っ立っている。

「揃っていない物はどこにあるの。それに、これはどういふ意味ですか」

「こんな杜撰なことをやっていることを、青井は知らなかったのか。大田がチェックしているときは、こんなことは無かった、と思った。理事会へ出された前月の移動結果報告に、共済脱退者の記述はない。貼られたメモによれば、一年前に入会した会員が退会し、共済も脱退扱いとなっている。」

「会員名簿を打ち出してください。ただちに」

理事会へ報告されている会員数と実際の会員名簿との間に相違があるのではないかと動揺した。

「つ、塚本さん。わ、私は知りませんよ。み、みんな、篠村さんがやったことです。彼はね。大ウソつきですよ。自分が全部やるから、せ、責任を取ると……」

紺野は、顔面蒼白となってわけの分からない弁明をした。

「専務理事へ報告するので、いま話したことを詳しく書いてください。いまから貴女は、共済担当者を外れてもらいます。空いている席へ移ってください」

と紺野へ指示した。

「君も同じように任務を一時停止してください。私の指揮に従ってもらいます。金庫の鍵と事務室の鍵、コンピューターの鍵を、すぐここに持ってくるように」

篠村へ、そう命じた。

「は、は。あ、あの……。あ、青井専務理事へ、ぼ、ぼくの方から、ぼ、報告します」

いまにもぶっ倒れそうになっている。

「報告は、私から行いますよ。資料を全部揃えてください。理由を洗いざらい話して貰えば済みます」

これは、もしかして、序の口ではないのかと言いたかったが堪えた。

「は、は。そ、それは。……えーと、えーと」

ぶっ、ぶっという携帯電話の音が篠村のカバンの中から聴こえた。

「青井専務理事からだつたら、代わってください」

どっせそつに決まっている、と思った。

半時間後に青井が儼然とした表情で事務室に入ってきた。

た。厚く塗った化粧がところどころ剥げ落ちて、平静さを装っているものの、タイムカードを押す指先は小刻みに揺れて定まらない。

「篠村君と紺野さん、すぐこっちへ来て」

私を一瞥すると、篠村たちをヒステリックに呼びつける。がみがみと怒鳴る声がブラインド越しに聴こえ、間もなく、二人は悄然として空の席へ戻った。

「塚本さん。私は、これから財務局長と組織局長へ相談しに行ってきます。留守中の処理は、全部貴方がやってください」

一方的に命じ、鱷皮のバッグを瘦せ細った腕に抱えて事務室を飛び出していった。

「青井さんに裏切られました。あの人なんか、私の伯父さんに頭を上げられないだから。ふん、何さ。偉ぶって。本当は、塚本さんに専務を下りてもらいたくなかったわ」

と呼びもしないのに私の席へ寄って来た紺野が、口をひん曲げる。彼女の伯父は元政治家で、青井の親戚は現職の政治家だ。

「裏切られたって、なんのことですか。貴女は、まず事実を書面に残すように。専務理事あてに今日の日付で、署名捺印してください。箇条書きでいいからね」



駄目押しをする。  
「は、はい。……そ、それが済んだら退勤させていただいていいでしょうか」

直面している問題から、逃げる魂胆のようだ。

「事実確認が終わればね。ただし、自宅に持って行っている協会の書類があれば、今日中に届けてもらいますよ」

すぐ青井の携帯へ電話を掛けた。紺野から聞いた言葉を解釈なしでそのまま伝えた。細道捜査網から打ち出された会員名簿を篠村が運んできて机上に載せた。集計表と名簿の実数は合っていたが、理事会に報告された数と二桁の差がある。

「過去一か月間の入退会者の名簿をここへ」

彼へ指示した。

「は、は。あ、あの、そ、それは……」

相変わらずはつきりしない。

「すぐにやってください。事実確認をするだけです。紺野さんが、篠村さんへ任せていたと言っている。関連があるかどうか点検します」

コンピュータールームを指さして、急かせた。

青井宛に出された紺野智子の文書によると、問題を発生させた経過はこうだ。

が運ばれてきた。退会者扱いにされている名簿を見て驚いた。私が、汗水を流して歩き回り増やした会員たちの名前が多かったからだ。

「こんな報告は一度もなかったではないか。退会した理由もおかしいぞ。共済を脱退するから会員も辞めたとなっている」

と指摘した。

「じ、実は、きゅ、休業補償の、か、加入審査に間に合わなくて、せ、成立しなかったの、だ、脱退扱いになりました。ほ、報告しづらくて」

耳を疑うような答えた。

「なに。報告しづらいたとは、どういう意味ですか。正確なことを言わないでどうする」

「そ、そう感じているだけです。か、会員が、へ、減ったとは、い、言えませんでした。せ、専務理事に、報告したくとも、い、いつもいらっしやらないし」

睡然となった。青井の携帯へ電話を掛けて、いま聞いた話と紺野が書いた文書の中身などを報告した。

一夜明けで出勤すると間もなく、紺野が青井宛の書面を私に手渡し、ばたばたと私物をカバンに収め始めた。

銀行から届いた結果に基づき、共済掛け金が振替出来なかった分について、併徴兼振込案内の通知書を作って当該会員へ送った。

念のために電話を掛けるよう業務マニユアルではなっているものの、相手が「残高不足など起きるはずがない」って言い張るような、自尊心の高い会員なので掛けづらく、度々、篠村亮介さんに援助を頼んだ。

最近、掛ける件数が多くなって、逡巡して対応しきれないうちに月が越し、新しい請求書を作らなければならなくなつた。

相手の同意を得ないうちに併徴は出来ない。そうこうしている、篠村さんが、ここは自分に任せておけと言ってくれた。

篠村さんは、青井専務理事には自分から報告して置くから心配ないと言っていたので、安心していった。責任の大半は自分にあると思います。

となっている。バブルが崩壊し企業経営が厳しくなり、残高不足で口座振替不納が大量発生する時代に入っていた。時代の変化に伴う業務の激増をこなし切れず、遅滞している事態を隠し、なんとか取り繕うとしたのだ。

間もなく、細道捜査網で打ち出された入退会者の名簿

尋ねると、青井に対して、半前に電話で退職を申し出ているという。事実かどうか確認するために携帯へ電話をかけたが繋がらない。

「離職票は、あなた宛てに後日送られますからね。その写真を持って行ってくださいませんか」

顎をしゃくって、デスクマットの下に挟まれてある写真を指さした。一葉はオーディリー・ヘプバーンで、もう一葉は、北日本八幡宮の本殿を背景にして撮った青井と篠村、紺野の写真だ。三人は、両手を重ねあい、口元へ、うっすらと狂気の笑みを浮かべている。

「これは要りません。もう見たくもありませんから。……寒い中を拝みに駆り出されて、頓珍漢で血の代わりにワインで祝宴を上げて。……あー、あほらしい」

と心えて、オーディリー・ヘプバーンの写真だけ手に取った。彼女が事務室から出て小一時間後、青井が出動してきた。何事も起らなかったかのよう、平然さを装い篠村へ急ぐ必要もないと思われる業務を命じて、  
「塚本さん。ちょっとこちらへ」

とフラインドの横から乾いた顔を見せた。

今回の不祥事に対して、青井が財務局長と組織局長へ相談して、出した判断はこうだ。

業務に慣れない担当者が、次月の請求書を作成するために誤った処理をした。職員の名前を満たしていないことが、業務の流れを滞らせた最大の原因である。

処理方法について個々の職員に任せるのではなく、事務室全体で相談し問題を処理すべきであった。特に、専務理事不在時の管理体制が甘かった。

塚本専務の時代から、事務室内に担当者任せと、プラス面だけを評価する気風があり、困った問題について気軽に相談できる雰囲気を作られていなかった。

いずれにしても、事実と異なった処理を行ったことは重大な問題である。当該会員には極力迷惑が及ばないように、専務理事の責任で懇切丁寧に事情を説明し、未収金を回収する。

理事会对しては、事務の手続き上に瑕疵があったと簡潔に報告し、これ以上傷口を大きくしないこととする。

紺野智子氏が退職した件については、一身上の都合として扱った。これは、本人が再就職する際の支障とならないように配慮したものである。

という。要するに、重大な問題が起きたことを小さく見せ、露見しないうちに早く処理する。不正処理をした担当者の処分はせず、青井専務理事の管理責任も問わないと

疑問を抱いた私は、青井と篠村の不在時に、細道捜査網を使って、今年度分の組織と一般会計、共済会計と有限会社会計のデータをフロッピーディスクに保存し、自席の完全ロック式デスクの中へ仕舞った。

青井は「有力な会員へ挨拶に回る」との理由で夕方まで出勤しない。総務が担うべき理事会の諸準備を私に押し付け、有限会社の取締役会を開かず、赤字問題の原因究明と事業の発展に熱意を燃やさない。いったん権限を制限された篠村が、再び会計の担当者として青井の後押しで任せられ、金庫と事務室の鍵、コンピュータの鍵も彼に渡された。

紺野が退職して半年後の春。

市役所から地方税の源泉徴収簿兼納付書が届いた。職員が運んで来た封を開け書面を読んで驚いた。紺野がまだ在籍していることになっていて、半年分の地方税が未納になっている。

「ちょっとこちらへ来ていただませんか」

と篠村を呼んだ。

「な、何が。……も、問題でもありませんか」

彼は、薬害問題での社会活動に参加して評価を得るよ

うものだ。

「私は一部賛成しかねますが、指示されたことはやりますよ。それから、紺野さんは八幡宮で撮った写真は、あー、あほらしいと言っていました」

チクリと刺した。

「ふーん。他に何か喋っていたかしら」

一瞬、恥ずかしそくに厚化粧の下の斑皮膚を赤く染めながら、視線を逸らして尋ねた。

「それだけです。いずれ、今回のこともあるわけだし、赤字決算書のデータは検証させていただきまからね」

「あー。……あのデータはもう廃棄したわ。篠村君の手違いでシュレッダーにかけちゃったのよ」

と答える彼女の顔が小さく痙攣しているのが分かった。

「コンピュータには記憶が残っているでしょうから、またプリントアウトしてもらいますよ」

新しく正規の職員が採用され、一時停止状態に陥った業務が大分回復した。青井の報告によれば、発見された今年度分の未収金問題は一応、解決の方向に向かっていくという。紺野と篠村が組んで犯したミスと青井の処理の仕方、プリントされたデータが廃棄されたことに対して、大きな

うになっているせいか、言葉に少し淀みがなくなっている。「この納付書を点検してください。半年分の未納があるそうですよ」

「えっ。の、納付していますよ。移動届だつて提出しています。……おかしいな」

長い髪をくしゃくしゃに掻きまきり、汗だくとなつてい

る。「じゃあ、私が直接、市民税課に電話で確認をとろうか。それとも貴方が自分でやっていただけですか」

独楽鼠のように、息を切らして動き回っている彼がわれに思えた。

「い、いえ。ぼ、ぼくが電話します。でも、変だなあ」

首を傾げて席へ戻って行った。すぐ電話をするのかと思っていると、なんら手を打たず別の業務をこなしている。会員から至急の電話で、「これから警視庁の刑事がやってきて、犯罪に関わった疑いのある者に関して調査を受ける。立ち会ってほしい」との相談があり、すぐ青井へ電話を掛けた。その際、納付書の件について報告した。

「地方税のことは彼に任せてください。立ち合いの件は、ほどほどにやってください。法律の専門家じゃないんですよ。素人が首を突っ込んで駄目ですなえ」

静かな空間に臥しているらしく、弱い声で咳き込んで  
いるものの、毒気だけはしっかりしている。

立ち合いを終えて事務室に戻ると篠村は出かけていた  
新人の職員に尋ねると、「市役所へ行った。出かけるとき  
に、今日は直帰すると予定表に書いていたが、なぜかふさ  
ぎ込んでいました」とのことだった。どこか腑に落ちない  
嫌な感じがした。青井は出勤して来ない。退勤カードを押  
しながら、ふと、青井へ支払っている給料の処理を篠村は  
どうやっているのだろうか、と気になった。

篠村の妙な行動に疑問を抱いたまま、翌日を迎えた。  
朝の事務室打ち合わせを終えると、席を立って、なん  
ら報告のないまままで、仕事に取り掛かり始めている篠村  
の傍へ寄り、

「昨日の件は、どうなっていますか」

「は、は、え、えーと。な、なんでしたっけ」

髪をぐしゃぐしゃに掻き揚げてとぼけた。

「市役所から届いている納付書のことですよ。昨日、市役  
所に行ってきたんでしょ」

じろつと睨みつけた。

「そ、それはですね。む、向こうの間違いでした。て、訂  
正してくれるそうです。ほ、本当ですよ」

「ご友人の方と言っておられます」

席へ戻って受話器を手を取った。相手は、知人でもあ  
る市役所の市民税課職員であった。

「至急、ご報告したいことがございますので、ご来庁いた  
だけませんか。訳はその時にお話いたします」

声を潜めている。

「分かりました。昼にお会いしましょう」

友人と話したふりをして、受話器を元へ戻した。

相手が至急に報告したいこととは、こうだった。

昨日の午後三時過ぎに、貴協会の篠村亮介氏が来庁され、  
市民税課の私を指名し相談をなされた。私が指名されたの  
は、葉害問題で、彼と二度、ご一緒したことがあるからだ  
ろつ。

塚本猛さまの部下だからと、安心して相談に応じた。意  
外なことを依頼されて困っている。上司に報告したところ、  
大事になる前に、お知らせすることが先決と指導された。

篠村氏が話したところによると、退職した職員の移動届  
をやっていなかった。遡っての請求を避けたので未納分  
はないことにしてほしいとのことだった。

問題が大きくなると、解雇されるかもしれない。そうな  
ると、先々、妻子を食わせて行けなくなるし、世間体が

黄ばんだ歯を剥き出して、そんなことは心配無用と言  
わんばかりである。

「それならそうと、結果の報告をしていただかないとため  
ですよ。青井専務理事には、話してあるんですか」

念のため尋ねる。

「ま、まだです。だ、大丈夫ですよ。舐めないでください。  
こ、こつちは、い、忙しいんですから」

あつちへ行ってください。邪魔だな、という塩梅で掌  
を振った。

「ほう。それなら安心です。いつ訂正の書類が送られてく  
るのか、私が電話をかけて確かめますね」

癪に障ったが、ひとまず引き下がった。市役所の担当  
者が書類作成を間違っはすはない。なにか仕出かしている  
な、と勘繰ったのだ。

「は、……は。塚本専務副理事ば、ぼくのことを信用して  
くれないんですね。あーあ、もうやってられないなあ」

腕を頭の後ろに組んで、大きなため息をついている。

「塚本副専務さん、お電話です」

四

と臨時職員の女性が告げた。

「誰からですか」

悪い。なんとかしてほしいと言っていた。

仕方がないから、その場は「分かった」と言い逃れたが、  
公務員として不誠実な対応をしてしまった。問題が発覚す  
れば、処分される状況に置かれている。事態を鎮静化して  
ほしい。

移動届がない方の税金を、市役所が退職された方へ直接  
請求することは手続き上、不可能に近い。

とつものだ。

「ご迷惑をおかけしました。事務室内部の不手際で、いら  
ぬご心配をおかけして申し訳ございません」

赤面した。協会の事務室は、いい加減なところだと相  
手に思わせかねない。昔、青年運動時代に関わった私の仲  
間が市役所に大勢いる。相手の上司もその一人である。お  
そらく、その方面から解決のための方策を指導されたので  
あろう、と考えた。ただちに青井へ事態の重さを報告する。  
「あら、……そつなの。ほんとに、何を指導監督してい  
るの。全部、塚本さんの責任よ。もうやってられないわ。…  
…私はしばらく休みますので、お任せします」

一方的に電話を切られた。事務室に戻ると、すぐに篠  
村を会議室に呼び出した。

「公務員に嘘を付かせて、公文書を偽造させてもしたら、

相手は処分されるんですよ。第一、貴方は、まだ結婚して  
いないでしょ。」

性もないやつだとばかりに詰った。

「は、は、い、いえ。う、うそを、つ、つけとは、た、頼  
んではいませぬ」

髪をぐしゃぐしゃにし、鼻水と涙で顔がべとべとに  
なっている。

「すぐに納付して、移動届を出しましょう。紺野さんに請  
求書を回せば済むじゃないか」

辞めた者の分まで支払う費用はないのだ。

そこへ突然、青井が事務室のドアを勢いよく開けて  
入ってきた。ロングスカートと分厚いコートを着けた蟹股  
に、べつとりと濡れた髪が不気味である。

「塚本さんと篠村君は、これからすぐに会議室へ来てくだ  
さい」

と命じた。他の職員たちは何事が起きたのか、という  
表情で総立ちになっている。篠村の肩をびしりと叩いて、  
顎をしゃくった。

会議室に入ると、

「いまさら過去の問題をほじくって何になるのよ。退職し  
た相手に請求書を回したら、世間の笑いものになるわ。雑

支出で処理してください」

と、彼女は口をひん曲げる。唾を飛ばして喋る様は鬼  
のような形相だ。

「そんな解決の仕方は間違いですよ」

百葉箱の中で、平均気温を計測しているような彼女の  
感覚に腹が立った。

「以前のことだけだね。……横領問題を起こして辞めた職  
員のことを忘れたのかしら。あのときは、金を戻してもら  
うだけで、理事長に対してさえ報告しなかったというじゃ  
ない」

と、彼女は、いま起きている問題とは関係のないこと  
を持ち出した。横領は未遂で終わった事件であって、犯行  
は成立していない。財務局長と組織局長の判断を仰いで公  
開せずに処理した事件である。それと今回の問題は解決の  
仕方が異なる。

「へへへ。……で、たためなことをしていたんですって  
ね。ぼ、ぼくには厳しいことを喋るのに」

篠村が、ここぞとばかりに反撃してくる。彼は事件のあ  
とに採用されたのだが、処理した内容については、事務室  
内の会議の場で、私から機密扱いとして教えている。

「黙っていなさい。この私に恥をかかせた償いは、十分

やっってもらいますからね」

そう詰って青井が、テーブルの上を手で激しく叩いた。

「引き合いに出さないでください。あの問題は、青井専務  
理事も同意して処理したことですからね。今回の件を雑支  
出扱いにして、決算の処理が通るはずはないですよ」

突っ張った。

「私の指示に従ってください。これは命令です」

無然として、睨んでいる。

「ぼ、ぼくが、み、みんな悪いのです。ぼ、ぼくが支払い  
ます」

彼は、長い髪を両手でぐしゃぐしゃに掻き揚げ、汗だ  
くとなっている。

「馬鹿もいい加減にしないと、もう怒るわよ」

二人のやりとりに呆れ、

「私は、責任を持ちませんから。正しく迅速に解決してく  
ださいよ。外には、一切、洩らしませんから。あとは財務  
局長と専務に任せます」

捨て台詞を残して会議室を出た。青井は、財務局長と  
税理士を丸めこんだらしく、紺野が支払うべき地方税を雑  
支出扱いとして、月次決算報告に計上し総会をも通過させ  
た。

椎間板ヘルニアの予後は一向に良くならず、業務の量  
が増えるのと比例して悪化した。事務室内のやりきれない  
息苦しさから解放されるのは、会員の要求実現と組織拡大、  
訴訟問題での戦い、企業スタッフの事務講習会、組織拡大  
と新規起業相談、税務調査への立ち合いなどで出張するこ  
きだけであった。

きだけであった。

皐月雨で事務室の窓が濡れ、北上川の流れが見えない。  
なんとなく嫌な気配のする午後だ。電話だな、と一瞬感じ  
て振り返った。間もなく電話の音が鳴り、

「塚本副専務さん。系の渡の理事の先生からお電話です」

と臨時職員が声をかけた。不安な気持ちを抱きながら  
受話器を取った。

「塚本さん。いつもご苦労様です。今日は、調べていただ  
きたいことがあって電話いたしました」

と切り出して、相手が意外なことを話し出した。

今年の一月と四月に理事会へ出席して、一泊し、系の渡  
へ帰った。その際の旅費を篠村君に請求したところ、現金  
書留郵便で送金したとのことであった。

電話した後、一週間経っても届かないので、再び篠村君

へ電話をした。すると、確かに送金したとの回答である。事実関係を確かめて、回答してほしい。この件は、他の理事に漏らしていないので、穏便に解決してくれないか。今の青井専務理事さんは、まったく管理能力がない。事務室へ何度電話しても、いつも留守でらちが明かない。会員の間では、かなり評判は悪いよ。

という。

「分かりました。すぐに返事いたします」

と答えた。篠村君は、嘘をついているのではあるまい

な。この間、地方税の納入問題で青井から油を搾られたばかりだし、果てな……と首を傾げた。コンピュータ室で細道捜査網を忙しく操作している篠村の傍に歩いて行って、肩をちょこんと叩いた。

「は、はい。な、何か」

ピクリとさせて顔を上げた。肩まで垂らした髪からアロマ香水の匂いがした。その髪に毛玉と埃がついている。

「ちょっと聞きたいことがあるので、調べて教えてくださいませんか。急いで」

問い合わせのあった電話のメモを渡した。

「は、はい。い、いま、ここの作業をやってから、しますので」

「あと何分かかるのですか」

と訊いた。

「じ、十五分もすれば、はい……」

相手は早くも汗だくとなっている。

「待ちますよ。上にはすぐに報告するから、そのつもりで」

携帯電話で青井へ、問い合わせ内容を伝えた。

「何よ。そんなちっほけなことは、いちいち私へ報告しないでやって頂戴よ。……もう」

一方的に電話を切った。こういつ対応をしてくるときが一番危険なのだ、と感じた。新規起業相談の電話を受けている最中に、篠村からメモで報告があった。“送金済み”だという。“いつどこの郵便局から送金したのか。控えはあるか”とメモして、立ったまま返事を待っている彼へ渡した。電話を続けながら、篠村の動きを目で追った。

彼は汗だくとなって、送金の控えを探している。電話が終わったあと、彼を手招きして尋ねた。

「控えはありますか」

「そ、それがメモだけ残っています。え、駅前の郵便局から、ま、間違いないで送りました」

髪をぐしゃぐしゃに掻き揚げている。

ンですよ」

えっと吃驚して相手の顔を見た。大田と二人で焼き鳥店に行っただとき、何度か席を同じにしたことのあるシヨートカットで眼の澄んだ人だった。

夕陽がビルの間から差し込む中を気分よく歩いて、事務室へ戻った。

「明日の午前中に、糸の渡へ一緒に行つて調査し、そのあとで役員のクリニックへ報告しましょう。それしかないよ」

事務室のデスクで、珍しく、しょんぼりとしている篠村に声をかけた。

「は、はい。す、すみません。ぼ、ぼくの記憶違いではないと思います。ほ、本当です」

個人の財産権の問題へ発展しているのが、本人には理解できないらしい。

「ついでに、明日、車を運転してただけませんか。戻ったら、夕方、理事長を北日本国民休暇村まで送っていく予定ですからね」

と頼んだ。理事長は、他団体の行事に招かれて出張することになっている。理事長の指名で、その送迎とサポートを私が担うことになっているのだ。

「傘をお貸しいたします」  
という声が背中から声がかかった。振り向くと、郵便局の女性職員が立っている。  
「お気遣い有難うございます」  
「紅い傘を受け取った」  
「塚本さん。頑張ってください。局の女性たち全員がフア

「そうか。じゃあ、私が郵便局へ行つて確かめてくるからね。その間、どこへも出かけずに、引き続き控えを探してください」

指図してすぐに出かけた。駅前郵便局では、お得意さまに迷惑をかけては申し訳ないという塩梅となつて、局長直々の指揮下で控えの調査に取り掛かった。もしかして、手違いがあつて本局に資料が残っているのかも知れない、とわざわざ本局へ問い合わせる。

「申し訳ございません。あとは、糸の渡郵便局へ問い合わせるしかないようです」

郵便局長は平身低頭した。外へ出ると俄か雨が降っていた。不可解なことがあるものだ。送金の控えがないのに、送つたと強弁する。もしも嘘を付いているなら早晩、真相が明らかになるだろう。そんな幼稚なことが分らないはずもないが、と考えた。

「は、は、……えーと。えーとですね。ぼ、ぼくは、いま免許証が切れているんですよ。で、ですから運転できません」

そう答えて伏せ眼となった。

「更新手続きをしていなかったんですか」

不審に思っただけで尋ねた。

「い、いえ。あの……そのう」

両手を顔の真ん中で交差させている。

「じゃあ。私の車でいきますよ。それしか、午後五時までに戻る方策がないからね」

ヘルニア摘出術後の労働負荷が重く、睡眠不足の上に不慣れであるから運転には自信がなかった。糸の渡郵便局に着いたのは午前十時過ぎであった。昨日のうちに連絡を入れてあったものの、土曜日のことで窓口は開いていない。局の裏手に回った。休日夜間の窓口担当者、昨日のうちに現金書留扱い郵便物の出納簿を検査して、「問い合わせの件については、記録にごさいますんでした」旨の文書回答を準備し待っていた。

篠村は、一歩二歩と後ずさりしながらやり取りを聞き、半ば逃げ腰である。

「あのですね。こんなことを言っただけ失礼かもしれませんが

が、百パーセントの確率で、送ったという方の誤解ないし横領が本当の理由ですよ」

と相手が答えた。そつと後ろを振り返ると、篠村は身

体をいやいやとばかりに振って、顔の前で両手を交差させ

「違つ」と否定している。瞬間、まただまされていることが分かった。かつと頭に血が上る。

「分かりました。本当にお手数をおかけし、申し訳ございません」

深く礼をした。「先に新幹線で帰ります」という篠村を厳しく叱りつけて、役員のクリニックへ寄り、調査の経緯を報告した。

「事務室へ戻り次第、旅費を送金いたします」

「それは、ご苦労さまでしたね」

相手は、惘然として茶も出さない。嘘をつかれて気の毒にという顔である。

篠村は「信用してくれない人と一緒に帰りたくない」とこねて、無理矢理、新幹線に戻った。食事を摂ったあと、高速道路を運転しているうちに、注意力が低下し、気が付いたときは、中央インターを通り越して東インターに近かった。慌ててハンドルを切り、ランプから降りる。理事長を迎える時間まで僅かしかない。焦って裏道に入った。

信号のない交差点で一旦停止せずに車を進めた。タクシィが右手に見えた途端、強い衝撃が奔った。

意識を取り戻してウィンドウガラスの向こうを見た。相手の車は前輪の車軸が折れ、運転手がうつぶせになっている。こっちの車のボンネットから、僅かに煙が立ち上っている。外へ出ようとしたがドアが開かない。ガソリンに引火したら危ないと判断し、後部座席のドアを開けて脱出した。相手の運転手に声をかけているところへ、通行人の一人がやってきて、

「下手に動かさないで、警察に知らせたほうがいいですよ。タクシィ会社にも電話を掛けて、救援を頼みなさい。現場を荒らさない方がいい」

とアドバイスしてくれた。振り返ると、事故の影響で交差点が混雑している。間もなく、パトカーが着いた。靴の中で携帯電話が鳴った。

「ちょっと。何してんのよう。こっちは、事務室で理事長が待っているのよ。どこでぶらぶらしているのさ」

青井のプチ切れた声である。かいつまんで事情を話し、理事長にはタクシィを利用していただくように頼み、電話を切った。相手の運転手は、救急車で病院に搬送された。警察による現場検証が終わったあと、タクシィ会社の渉外

係りと今後の連絡方法を打ち合わせ、知り合いの整備工場に頼んでボンネットの壊れた車を工場へ運んでもらった。頭と頸がもうろつとして、歩行がままならない。気が付くと頸が顔と同じくらいの幅に膨らみ、その顔も風船のように腫れていた。

事務室へ戻ると、青井と篠村がブラインドの後ろにいた。嬌声とそれに応えて笑声がしている。思わず、ぞつとなった。足音に気付いたらしく、陰から二人が顔を覗かせた。

「あら、生きていたの。不死身だね。オホオホ」

グロテスクな化粧を施した女の顔だ。

「なんという言い方ですか。こっちは、篠村君の犯した問題で振り舞わされ、もしかしたら命を落とすところだったんですよ」

切り返した。

「いつその世に逝けばよかったのにねえ。塚本さんは、問題を大きくするし、しつこいんだからさ」

「は、は、そ、それは。そ、そのう。ひ、ひどい言い方だと、お、思います。でも、ぼ、ぼくが悪いんです。ウへ、ウへへへ」

と小声で口を滑らし合うのが耳に聴こえた。がらがら

と音を発して崩れていく彼女たちへの無念の情けを、泣き出したような気分を感じ、怒りで身体に寒気を覚えた。こうなれば、これまでの問題をすべて洗いなおしていくしかない。彼女たちが罪を犯していたなら、北日本中小企業協会から去ってもらうしかないと思った。すぐに退室し、妻へ連絡を取った。病院で検査を受けた結果、強度のむち打ち症と診断され、休暇を取った。

五

むち打ちとヘルニア摘出後の不調とが重なって、身体は不眠症へ、やがて鬱症状に発展していった。健康状態を案じ、事務室の行方に危惧を抱いた理事長が、深夜、密かに自宅を訪れて来た。理事長の真意を聞いて私は、これまで抱いていた疑問を率直に話し、問題の解明に向けて協力してほしい旨を訴えた。

「塚本さんと私は、協会発足時からの同志です。これから、密に連絡を取り合いますよ。作戦は、青井たちに最後まで気取られてはなりませんからね」

「久しぶりにその言葉を伺いました。もう千人力です。宜しくお願い致しますよ」

「ハツハツハ。俺たちは鬼と金棒の二人組だって、ずっと言われて来た間柄だべ。財務局長と税理士がのさばって、

裏に何か隠し事があるなと感じて、反対した。

「本来なら、病気の貴方は首になっても仕方なかったのよ。助けてあげているんですから、その位やって貰わなくては困るじゃない」

と、呆れ果てた理屈だ。

「なんで業務上の事故が原因で解雇されるんですか。撤回して下さい」

唾を彼女の顔に浴びせて抗議した。

「私は知っているんですからね。貴方が、私を解雇するかどうか悩んだことを。…随分、ひどいことをして居たそっじやないですか」

嫌な顔をして唾をハンカチで拭くと、突然、二十年前のことを喋り出した。あのとき、初代理事長と二人の副理事長が「即刻、解雇すべし」と主張したのに対して、私が受け入れを拒んだ。その事実を知っているのは、現理事長と現財務局長しかない。

そのとき、青井は家庭内のもめごとが原因で、急に遠方の親戚のもとへ家出して仕舞った。再就職が困難の時代である。“心の病気が原因ですから、待ってあげてください”と説得して二か月の休職扱いにしてもらい、解雇を免れさせた。いまここで真実を話せば、青井は逆上しかね

監査役を騙し、理事長であるこの俺を飾り物にしがつてさ。許せないなあ」

盆が過ぎて、ようやくむち打ちが良くなり元の業務がこなせるようになった。事務室内では、西暦二千年を前にして、コンピューターの買い替えが検討されていた。細道捜査網に設置されている時計が誤作動し、組織と財務会計の継承に支障が生じかねない。早く作業をしないと危ない。N通信社のプログラマーも焦っている。というのが、青井たちの意見である。

「塚本さん。ちょっとこちらへ来てくださいませんか」

フラインドの陰から首だけ出して、青井が呼んだ。人差し指の先を鍵の字に曲げている。書き始めた新聞の原稿をいったん止めて、背広の内ポケットへ手を入れ隠しマイクのスイッチをONにし近寄った。

「買い替えの件だけどね。役員の同意を取り付けていただけないかしら。私の意見に、誰も賛成してくれないのよ。貴方でない、と、説得できないわ」

と青井は、いつになく低姿勢である。

「部品を取り換えれば済むと思います。三年前に導入したばかりの機種が、いまごろ欠陥商品だと言われても、納得がいきませんね」

「そんなことよりも、コンピューターの買い替えを止めさせなくてはならない。開発した費用は、まだ半分も回収されていないのだ、と考え直した。」

「そのことは、いつかの機会に説明します。買い替えの件について、理事長と財務局長はどう考えているのですか」

話を逸らした。

「ふーん。塚本さんは変わりましたね。昔はこんな人ではなかった。困っている人を助ける、正直で正義感が強かった。財務局長は同じ認識です。…あんなボケ理事長なんか、なんともありません」

バッグから花柄のついたハンカチを取り出し、ぐちんと鼻水を噛み、そのまま目元をぬぐっている。よく見ると、真珠のネックレスをつけ服装が派手だ。

「協会のトップに対して、ボケとは失礼ですよ。撤回して下さい。細道捜査網はソフトの補強をやれば、二千年問題は乗り越えられると思います。無駄使いは止めて、事務室体制の強化にお金を投入した方がいい」

喋っても無駄かもしれない諦めつつ、意見を述べて席へ戻った。

新しい軋轢と季節の変化に着いていけず鬱症状が悪化し、医師の診断で一週間の自宅療養となった。復帰すると、

三役会でコンピューターの買い替えが本決まりとなり、事務室内は異様な興奮に包まれていた。N通信社のプログラマーと篠村がコンピューターの前で、細かい打ち合わせをしている。

「か、回復。お、おめでとうございます。し、心配しておりました。ちよ、ちよっとN通信の方と、外で、ゆっくりしてきて良いでしょうか」

篠村が申し訳なさそうに許可を求めて来た。

「いいけれど、あまり長くは困りますね。青井さんの予定はどうなっていますか。役員回りと予定表にあるが、何時に戻るのかな」

大きな資金を投入する事業の場に、事務室の責任者が不在なのはおかしい。もしも間違いが起きたら、誰がその責めを負うのかと思った。

「ゆ、夕方の五時ごろに、い、いらっしゃるそうです。け、今朝、自宅へ伺って、そ、そのように聞きました」

そう答えたあと、しまったとばかりに、一瞬、ぱっと顔を赤らめたのが分かった。

「自宅へ、なんの用事で行ったんですか」

怪訝に思った。新婚ホヤホヤの男が、朝早くから離婚したばかりの女性宅を訪れたとは解せない。

「は、は。……あの、その。弁当と衣類を、お、お届けしました」

顔の赤がますます濃くなっている。

「いつから、そんなことをしているの。専務から頼まれたのですか、それとも自発的にやっているの」

体調の優れない青井を憐れんで、部下が物を運んで行くぐらいい変ではないが、不自然な気もする。

「ず、ずっと前からです。……いやですけど、し、仕方がない。でも、こ、これは報告しないでください」

長い髪を前に垂らし頂垂れた。彼がN通信社のプログラマーと一緒に事務室を出て行ったあと、デスクの中から二枚の文書保存用FDを取り出し、コンピューター室へ入った。IDとパスワードを入力する。認証と文字が表示された。表示されたファイルから過去のデータを呼び出して、ダウンロードした。僅か十数分の作業であった。新人の職員と臨時職員に対しては、古いデータを閲覧していると説明した。

コンピューターの買い替えと同時に、古い機器が廃棄され、赤字決算書のデータが消去された。

啓塾が過ぎても積雪はまだあった。長男の進学先が決

と、彼女が話す後ろから新幹線のアナウンスが聴こえた。出張先の東京から戻ったばかりらしい。

「そうですか。直ぐタクシーを呼びます」

「さつき篠村君も呼びました。先に事務室へ行っていますから、兎に角早く来て下さい」

「分かりました」

電話を切ると家族へ先に休んでいるように言って、タクシー会社へ連絡を取り、テープレコーダーの電池を確認してシオルダーバッグに入れた。タクシーへ乗ろうとした時、頭上から空を渡る鳥の声が聴こえた。見上げると満月の光を浴びた銀色の白鳥が二十数羽ブーメランのような形を作り、歓喜の声を上げて北方を目指している。

「北帰行ですよ」

発車して間もなくタクシーの運転手が言った。堤川に飛来していた白鳥が一斉にシベリヤへ戻って行くこととしているのだ。窓を開けて白鳥の歌声を聴く。天使がハーブを奏でてでもいるかのような、空を切る羽ばたきの音が歌声の合間に流れた。

「春が来たらしいね。中心街までお願いします」

と行き先を告げた。タクシーは住宅街を抜けると急坂を下り堤川沿いに走り、高校や大学のある静かな通りを過ぎ

「お父さんへ、職場の青井さんからです」  
妻は、こんなに遅く何か起きたのだろうか、という表情を見せながら受話器を私へ手渡した。  
「変わりました」

と言って、子機を手にしながらソファに座った。

「直ぐに事務室へお出でいただきたいのです。明日だと困ることなんです。信じられないようなことが起きたのですよ。もう困っちゃっな、ホントに」

（12番線に列車が入ります。ご乗車の方は黄色い線まで下がってお待ちください）



て商店街に入った。映画館と書店などのある桜町まで三分を要した。料金を支払ってタクシーから降り、繁華街の路地裏を歩き、九階建てのビルディングの夜間の出入り口から中へ入った。エレベータのボタンを押そつとした時、後ろから篠村亮介が急ぎ足でやって来た。

「おう。こんな遅い時間に呼ばれて吃驚しただろう。ご苦労さんだねえ」

彼へ声をかけた。

「いやいや。塚本さんこそ。ぼ、ぼくはあ。……でも何でしようねえ」

と彼の声は震えている。七階でエレベータを降りて事務室の入口に着き、暗証番号を入力してドアを開けた。

「ちよつと、あんたたち何してんのよあ。鈍問なんだからこつちはねえ、長時間の会議から戻って来て疲れてんのよあ。いい加減にしてよあ」

青井の罵声が飛んできた。彼女は、汗と油の入り混じった汚い髪を振り乱しながらソファを指さした。手に書類を掴んでいる。篠村を手招きしてソファの一番奥へ座った。寒冷地仕様のビルとは言え、休日の暖房は使えないから室内は寒い。青井は小さな電気ストーブのスイッチをONにして自分の傍へ置いた。

「急用ってなんのことでしょうか。時間も遅いし明日の業務に響きますから、手短にお願います」

篠村の顔をじつと見つめたきりでも切り出さない青井へ、しびれを切らして尋ねた。

「いまお話しますから、急がせないでください。私は辛くて泣きたいくらいなのよあ」

と言つて彼女は花柄模様のついたハンカチで涙を拭き、ついでにそのハンカチで鼻水をチーンとかいだ。嫌な感じを受けてビルの外へ視線を送った。真つ暗な窓ガラスに羽毛のような雪が当たって下方へずり落ちていくのが見えた。外は急に冷え込んできたらしい。

「じゃあ話すわ。よく聞いて。……今日の午前九時から午後五時まで東京の丁国際ホテルで開かれた全日本中小企業協会連合会の理事会へ出たのよ」

と切り出して、彼女は呼び出したわけを語り出した。

「会議が終わつて帰り支度をしているとね。本部の次長さんが“ちよつと青井さん”って呼んだのよ。何かしらと思つて次長さんの後からついて行つたの。そうしたらね

……なんて言われたと思つ」

彼女は腫れぼったい目で篠村の顔を見た。一瞬、これは、篠村に関係のある問題だなと感じた。

「えつ。な、何を言われたのですか」

彼は、真面目な顔で青井に尋ねた。

「うひひい。本当に分らないの。篠村君。私は貴方を一番信用していたのに、こんな問題を引き起こしてえ。私の顔に泥を塗つたのよ。悔しいい」

彼女は、顔を大きく引きつらせると、両手をわなわたと震わせた。

「ど、泥つて」

彼が長い髪を左手で掻き揚げた。右手は彼女をなだめるように掌を動かしたままだ。

「まだ分らないの。しらばつくれるんじゃないよあ。この馬鹿野郎」

ヒステリックに叫んだ彼女の膝から、オートクチュール製のショールがずり落ちた。

「馬鹿つて、いったい、何のことですか」

私は、彼女の野卑さに呆れながらも、肝心なことが分らなくて尋ねた。

「次長さんがこう言つたのよ。“本部への会費がこの半年間未納なんです、どつかされたんされたんですか”って」

信じられないような話に、思わず息を呑んだ。

「篠村君。今の話は本当ですか。本部へ会費を納めていなかったの」

彼女から刺すような視線を浴びて俯いている彼へ尋ねた。

「は、あの。いえ、あの、……そのあ」

彼は、顔中汗だくとなって口をパクパクさせ、両手でテーブルの縁を掴んでいるが腕は大きく震えている。

「篠村君からさつき携帯電話で聞いたんですけどね。会費は納めている。毎月の決算書にも記載してあるとおりだし、納入した証拠の納付書もあるつていうの」

そこまで話すと、彼女は肩で深く息をついた。

「それなら、何もおかしくはありませんね」

深夜にわざわざ、私まで呼び出す必要もなかっただろう、と思つた。

「そこには、銀行の確認印もあるし、小切手の控えもあるつていうの。どう思う。塚本さんは」

彼女は、平静さを装いながらも、目の下の弛んだ皮膚と頬をひくひくさせている。

「本部へ会費を納めていないというのは間違いではないですか。第一、青井さんが確認して出した毎月の決算書に納付済みとなっているでしょ。篠村君。本部への会費の納付書と、小切手の控えを見せてくださいませんか」

見てみないことには、嘘か本当か確かめようがなくて、篠村へ依頼した。

「小切手は、私の不在時に塚本さんが実印を押さないと振り出せませんかね。念のため」

青井が不在のときは、銀行の出し入れに専務副理事の私印が押し印を押す手順になっている。一か月前に指示された形ばかりの仕組みで、一度しか実行していない。

篠村は青井へ一寸会釈して席を立つと、せかせかしながら絨毯の上を金庫のある方へ歩いて行った。暗証番号を入力しチャネルを回す音がしたあと、再びせかせかする足音が聴こえて来た。彼がブルーの地に白線が二本入った手提げ金庫を応接テーブルの上へ置いて、ソファに座った。「開けて出したら、小切手を塚本さんに点検してもらってください。私には何が何だかさっぱりわからないからあ」

そう指示すると彼女は、くしょくしょになったハンカチで鼻水を拭いた。何か企んでいるなと思いつつ、逆らっても時間の消耗だと感じて、手提げ金庫のダイヤルを篠村の指示通り回した。

小金庫の中には銀行の小切手帳が入っている。いつの間にか、篠村が現金出納簿と入金伝票、請求書と領収書などを箱に入れてソファの傍へ運んで来ていた。小切手帳の

んの、け、決済を得ました」

彼が言い返した。

「二人とも責任の擦り付け合いは、止めなさい。みつともない」

彼女は、呆れたように言い放った。自分が事務室の最高責任者であることを棚に上げた姿勢である。

「会費の百万円は普通預金から支払うべきなんだけれども、残高が不足している。当座預金にある共済の手数料を協会に移管する手間を省いて、本部へ送るんだと篠村君が説明してくれたから、割り印を押したのです」

当日のやり取りを思い出しながら答えた。

「そんな細かい理由はいいんだ。肝心なのは事実かどうかでこと。分かるう。私は、少し頭を冷やしてくるわ。その間に、二人ともよく考えておいて頂戴」

そう言って、彼女は鱈皮のバッグを手にすると、事務室を出て行った。本部への納付書と小切手の両方を何度も見直した。篠村の書いた文字が、1の数字を4にし、そのあと4の数字を8に書き換えたように思えた。

数字を改竄したのではないかと疑問を感じて、篠村へ当該銀行から送達された当座勘定照合表を取り出してくるよう指示した。小切手に書かれた八百万円の数字と付き合

耳を調べて本部へ振り出した箇所をチェックした。M銀行の小切手帳の耳に二月末日送金の記述があった。送金額は八百万円である。出金伝票に同じ数字があり、元となった本部の請求書も同じである。

「確かに小切手には、八百万円の支出があるし、納付書にもそう書いてあるな。銀行の確認もある。なぜ、本部は収まっていないと言っているわけですか」

どこかがおかしいと疑問を抱いて、彼女へ尋ねた。

「そうなのよ。この半年間の本部会費、約八百万円が入っていないって言うのよ。篠村君からは毎月支払っているって報告されていたから、すっかり信じていたのよ。私、恥をかいた」

彼女は、納付の事実関係より自分の面子に拘っている様子だ。

「おかしいですね。……でも待てよ。この日。私は、小切手の耳にある八百万円の数字を、割り印した記憶がありませんよ。確か百万円だったはずですよ。だってね。一か月分と端数を足した分ですよと聞きました」

首を傾げた。八百万円は、本部への会費が半年以上分にあたる。

「そ、そんなことは、あ、ありません。た、確かに塚本さ

わせようと思ったのだ。彼は一瞬困惑した表情となったが、席を立ちせかせかと事務室の奥にある書庫へ入って行った。足が冷えて寒気がしてきた。三年前の夏に椎間板ヘルニアの手術をして以降、下肢に痺れが残り体温の調節が上手くいかないのだ。しばらくたって青井が化粧室から戻って来た。手に携帯電話を持っている。携帯電話でどこかと長話でもしてきたのだろうと思った。

「ああ。篠村君はどうしたの。あー、寒いわね」

彼女は、重大な問題が生じていたことを忘れたかのようになぶりである。

「書庫で当座勘定照合表を探しているはずですよ」

それにしても篠村は何をしているのだろうかと思った。たかが当座勘定照合表のことで手間取ることも無かるうと考えた。せかせかと動き回る音がして、やっと戻って来た。

六

「どうしたの。いつまでやってのんよ。書類一つ探せないの。うすのろめえ」

彼女が彼をヒステリックに彼を罵った。

「は、あ、あのう。当座勘定照合表が……。M銀行の二月分はまだ届いていないようです」

長い髪を左手で掻き揚げ、右手の人差指で黒ぶちの眼

鏡の真ん中を押し上げながら顔中汗だくだ。  
「えっ。当座勘定照合表は、月末から三日後には届く契約  
になっているはずだぞ。おかしいな」

と私は首を傾げた。

「それはそうね。……届いていないなら、今日のところは  
確かめようも無いわ。でも八百万円は送金したという証拠  
は在るわけだから、明日本部へ連絡します」

彼女は、ほっとした様子だ。

「あとは当座勘定照合表で確認すればいいですね。でも、  
青井さんが目を通したはずの月次決算書に偽りがあるとな  
れば、それも検証しなければなりません」

と答えた。これはとんでもない大問題へ発展するの  
ではないか、彼女の判断を迎えず、内密で理事長へ報告しよ  
うと考えた。

「月次のことはあとで調べるわ。ご苦労さん。ああ、これ  
で恥をかかずに済んだわ。それにしても本部も本部だね。  
よく確かめもせずにあんなことを言っつえ」

彼女は、相変わらず事実関係よりも自分の面子が大事な  
様だ。である。私は、篠村と一緒に手揚げ金庫や書  
類を所定の場所へ運んだ。ビルを出て桜町の繁華街を通る  
と、年度末の歓送迎会などで賑わっていた。

一夜明けた。

事務室で机の上を拭いていると、採用されたばかりの  
職員と臨時職員たちが次々に出動してきた。みな二十代だ。  
タイムカードを押したあと早速、朝の掃除とコピーの用  
意などに取りかかっている。篠村は相変わらず十五分の遅  
刻だし、青井は無断で出勤しない。篠村が携帯電話で連絡  
を取るつとしたが、電源が入っていない行方が知れない。  
自宅の電話にかけても応答しないという。

青井を待たせていても仕方がないと考えて、朝のミーテ  
ィングを始めた。昨夜の様子を説明して、青井専務理事と  
塚本専務副理事、篠村職員は本部への会費納入問題と月次  
決算書の間違いについて解決する。それぞれは自分の部署  
を守りながらも、三名への問い合わせや相談が寄せられた  
場合は、“あとで、ご返事します”と答えるよう指示した。  
ミーティングが終わると篠村は早速、M銀行の桜町支店へ  
出かけた。まだ届いていない当座勘定照合表を受け取りに  
行ったのだ。篠村が銀行から戻ると、打ち合わせたかのよ  
うに青井が出動してきた。若い職員へ愛想笑いをしただけ  
で篠村には見向きもしない。

「篠村君。ちょっと」

「椅子なんかは、不要です。ご用件を手短かに仰って下さ  
い」

「あら、……そう。早速ですが、当座勘定照合表は、さっ  
き銀行から篠村君がいただいて来ました。本部へ携帯で連  
絡を取りましたよ。本部でも慌ててねえ」

と切り出して本部とのやり取りを報告し、今日の午後  
一番に電車で本部の次長がここへやって来て、事実関係を  
照合することになった。自分は、私用で二時間ほど出かけ  
るので、準備をよろしく頼むと話した。

「出かける前に、事実確認をさせていただきます」

と彼女へ断りを入れて、篠村が銀行から貰ってきた当  
座勘定照合表を見た。確かに八百万円が引き出されていた。  
そうなる本部へ会費を送金した記録と一致しているから、  
問題は無かった。ならば、どうして本部は会費が未納だと  
注意したのか。なぜ今日の午後にわざわざ東京から出張つ  
て来なくてはならないのか。協会の月次決算書との関わり  
があるのか、と疑問に思った。

篠村はビルの管理室に空き状況を聞いて、事務室の上  
の階にある会議室を確保した。彼に指示して協会の財政関  
係書類を準備させた。青井は午後一過ぎになって戻って来  
た。ブラインドを天井まで引き上げると、鼻歌交じりで本

「椅子を持ってきて座ってください。あんまり私の近くに  
来ないで。精悍な男の体臭は嫌だから」  
シャネルの香水をぶんぶんさせながら彼女が言い、わ  
ざと自分の椅子を後ろへ引いた。

「あ、は、はい。た、ただいま」  
彼は椅子に足を引っ掛けそうになりながら立ちあがる  
と、せかせかと小走りになって彼女のいるブラインドの裏  
側に行った。こもこもという説教とびくびくする答えが十  
分ほど続いた。

「つ、塚本専務副理事さん。さ、青井さんがお呼びです」  
ブラインドの裏側から出て来た篠村が、後輩の職員の  
手前、平静さを装いながらもおどおどと伝えた。

「篠村君、青井さんじゃないでしょ。青井専務理事と言  
いなさい。失礼ね」

ブラインドの向こう側から罵声が飛んだ。ばかばかし  
いことを言っているなと思ったが、堪えて席を立ちあが  
つた。  
「椅子を持ってきて座ってください。あんまり私の近くに  
来ないで。精悍な男の体臭は嫌だから」  
シャネルの香水をぶんぶんさせながら彼女が言い、わ  
ざと自分の椅子を後ろへ引いた。

部の会議で出された資料を綴っている。

「青井専務理事さん。本部の次長さんたちがお見えです」

と新人の職員が彼女の席へ寄ってきて告げた。

「あらあ、お忙しいところをわざわざお出でいただいてすみませーん」

彼女は、いそいそと席を立って小走りに応接コーナーに駆けつける。私は彼らへ通一辺の挨拶をしたあとと会議室へ案内した。篠村は台車に書類の入った箱を乗せて会議室へ運んだ。職員に指示して茶を運ばせ、便箋を持って会議室へ向かった。ビルの外は急に上がった気温で、積雪が大分減っている。黄砂交じりの風が吹いて、いつも望める天王山運峰は見えない。

「じゃ始めましょうか。青井さんには大変失礼しました。今朝ご連絡をいただいて、出発前に財務担当者に聞いたところ、確かに会費の納入があったようです」

次長は、そう切り出して、本部としては、ただ単に会費の納入の正否だけでなく、北日本中小企業協会の財務管理の内容と、日常の事務室運営、とりわけ事務室体制の強化などについても、事情を伺いたいと話した。

「次長さん。失礼ですが私の聞きたい点は、会費の納入が事実であるかどうかであって、事務室運営うんぬんは内部

干渉に当たると思われます。時間と経費の無駄じゃないですか」

青井が突然ヒステリックな声を発した。私は驚いて彼女の顔を横から眺めた。先ほどまでにこやかであった顔が灰色にむくんで、目は狂ったように動いている。

「塚本さんが専務理事を降りられ、大田さんと他の職員が退職されていますね。青井専務理事さんにお電話しても不在が多くて、本部内でも非常に心配しているんですよ」

次長は、急変した彼女の顔色に気を使いながら話をすすめようとした。

「結構です。うちの協会に口出ししないでください。篠村君、早く説明しなさいよ」

彼女は悔しそうに唇を噛みながら、横にちよこなんと座っている篠村へ指示した。

「は、はい。あ、あのお。あ、青井さんが……。あ、青井専務理事さんが言いましたように、そのお。か、会費は……。えと、えーと」

彼は、手元の資料を見ながら確かに会費八百万円を送金したと説明した。

「青井ツキ子専務理事さん。一つ提案していいですか。…篠村君。証拠となる帳簿書類を次長さんへ持って行って

お見せしなさい」

険悪な空気を和らげようと思い、私は青井へ目で許可を求めた上で篠村へ指示した。彼は一瞬ぎよっとしたが、震える両手に書類を抱えて会議用テーブルの向こうに座っている次長の下へ運んだ。次長は同行してきた本部の職員と問題の箇所を点検し始めた。

何となく嫌な予感がした。ここまで点検してくるからには、青井も知らない問題が起きているのではないかと思っただのだ。

「いま本部の財務担当者に再度確認を取っています。正確さを期するため少しお待ちください。会費の送金先は銀座ですから分ります。……あ、連絡が入りました」

と次長が言い、携帯電話を掴んで会議室の窓際に歩いて行った。その姿を追って窓の外を見ると、春の陽射しが隣のビルのガラスを打っていた。手前のテーブルの真ん中で篠村が顔を下に向けてわなわなと震えている。そんな篠村の様子を見て青井はうんざりした様子だ。

「確認したところ、四百万円の入金がありました。篠村さん。M銀行から八百万円引き出して本部へ四百万円送りしましたね。……で、あとはどうされましたか」

次長が思いもよらぬことを言いだしたので、愕然と

なった。青井も、がばっと身を乗り出して相手と篠村の顔を交互に見た。

「あ、あのお。そ、それはあ。げ、現金で引き出しました。い、いえ。あ、あのお。お、横領ではありません。い、家に有ります」

篠村はサウナに入ってもいるかのように、顔中汗びっしょりだ。

「それが横領でなくて何になるの。何に使おうとしたのよ。オ。馬鹿なことを言っ。本当は、塚本さんのロッカーにでも隠したんじゃないの」

青井は目の下へ隈を出して、とんでもないことを叫んだ。

「なんです。私のロッカーに隠したとは、不穏当なことを言うのもいい加減にください」

彼女が口走った言葉には、陰湿な意図があると感じて抗議した。

「あ、…つい口が滑ってしまいました。小切手を振り出すときに確認したのが、……塚本さんでしたから」

言い訳したが、どこか不自然だ。「塚本専務副理事さん。彼の自宅に行つて現金を取り戻していただいけません。私たちは直ぐ本部へ戻つて事後対策

を協議します。青井さん。これは重大問題ですよ」

次長は、そう言い残すとさっと鞆を掴んで席を立った。青井はおろおろしながらもようやく立ち上がり、次長たちを追って会議室の外へ出て見送った。駅まで見送り戻って来た彼女は、目を吊り上げ泣きべそをかけた口元がぶるぶる震えている。いまにも癩癩玉が破裂して、そこいら中の物をひっくり返すような表情だ。

「篠村君、こっちへ来てっ」

髪を振り乱しながら、うつ向き加減で自席にいる篠村の肩を掌でびしりと叩いた。

「あ、は。……は。はい」

彼は、いまにもぶっ倒れそうな塩梅で席を立ちせせかせかと青井の席へ進んで行った。

がみがみこもこもと説教する青井のヒステリックな声と、おどおどと弁解する篠村の暗い声とがブラインドの後ろから事務室内へ響いた。新人の職員と臨時職員たちは何ごとが起きたのかという表情で互いに目配せしている。

「っ、塚本専務副理事さん。あ、青井キツネ、青井ウソ子、あ、間違いました。青井ツキ子専務理事さまがお呼びです」

篠村ががっくりと肩と落としながら、ブラインドの横

「貴女が全責任を取るのには当然です。ここまで問題が表面化したんですから、理事長に対して、すぐ事実を報せるのは専務理事の任務ですよ」

自分の面子にこだわる彼女へ追撃をかけた。

「いいから。現金を取って来て頂戴。善後策はそれから考えます。私は、これから先の自分のことで、頭がいつぱいなよオ。もうやってられないわ」

唇をぎゅっと噛みながら、事務室を出て行った。事務室内の職員たちが一斉に首を伸ばしてドアの方を見ている。

篠村を連れてビルの外へ出た。彼は無言のままである。桜町商店街の中心部にある駐車場に置かれている彼の車は、真っ赤のスポーツカーであった。

「っ、塚本専務副理事さん。ぼ、ぼく一人で家に行つて、お、お金を運んできますから、い、一緒に来なくても、結構ですよ」

彼が急に同行を拒んだ。まだ何か隠し事をしているのかも知れないと感じた。

「いや駄目だ。ここまでくれば勝手なことばさせられないんだ」

毅然として断った。簾のような雨の隙間から春の陽光

から出てきて小さな声で告げた。皮肉っぽい言い方を聞いて、私は、おっと驚いた。背広の内ポケットへ潜ませてあるテープレコーダーのスイッチを入れて、青井の席までゆっくりと歩いて行き、折りたたみ椅子を開いた。彼女の顔をじっと眺めた。化粧油が崩れて赤い地肌が浮かんでいる。

「近寄らないでください。その匂いが……。塚本さん。いまから篠村君の自宅に行つて現金を確保してきて下さい。その上で今夜、問題の原因究明をします」

と彼女は指示し、返事も聞かずに鱷皮のバッグへ何かを掴んで入れると立ちあがった。

「財務局長へのご報告は、月次決算書の間違いも含めて直ぐにやった方がいいと思いますよ。それから、私の口ツカ―に有るんでしょうとは、一体、どういうことですか」

椅子を畳んで睨んだ。返答次第では、名誉棄損で訴えるつもりだ。

「お詫びしますよ。貴方の間接的な責任だつて問われます。あ、悔しい。こんなことで、チャンスと人生をめちゃくちゃにされるなんて御免だわ」

花柄のハンカチが、彼女の右手の中でぐしゃぐしゃになっっている。

が差して来た。駐車場の隅に積み上げられていた雪が融けて水が側溝に流れ出している。

「じゃ、邪魔くさいなア。く、糞。しつこい。じ、じじいめ。も、もうどうでもいいや」

水の音に混じつて彼が口走つた小さな呟き声が聴こえた。車高の低い篠村のスポーツカーへ腰を下ろした。椎間板ヘルニア摘出術とむち打ちの後遺症で腰が曲がらない。

「ま、真面目に、や、やってられないよオ。い、いいですか、発車します」

音を発して車が動き出した。彼の横顔を見ると長く後ろへなびかせた髪が芸術家のように格好がいい。私はバックする車の後方に障害物がないかどうか確認した。その時、後部座席に牛皮のハンドバックのあるのが見えた。完全に閉め切れていないチャックの間から札束が覗いている。「ちよっと待てっ。篠村君。あのハンドバックはだれのものだい」

動き出した車のハンドルに手を伸ばして動きを止めながら、彼へ訊いた。

「は。はい。あ、あのお。……ぼ、ぼくのですよオ、と、当然でしょ」

彼は、ぎょっとしたように目をひんむくと、直ぐに目

を伏せて弱々しく答えた。

「ちよつと中身を見せて頂いていいかい。貴方には、いま横領の疑いがかかっているから、ただちに現行犯で逮捕できるんだぞ」

「あ、は。はい。……し、仕方ありません」

観念したように、彼はがっくりと肩を落としてハンドルの下部に両手を添えた。後部座席に手を伸ばしてハンドバックを掴んだ。見た目より中身があるらしく意外と重かった。助手席の股の下にあるレバーを引いて椅子を後ろへずらした。さっきまで射していた陽光が急に陰って、車外に激しい雨が降り出している。ハンドバックのチャックを横へ動かした。一万円札の束が二つとバラバラになった紙幣、それに銀行でどこかへ送金した控えの紙切れと何かの請求書、どこから届いた手紙の封筒、消毒用の薄っぺらなバック、部屋の鍵とショッピングカードなどがあつた。

「塚本さん。お待たせしました」

という声が出た。いつの間にか岸三郎が目の前に近寄ってきていた。

「考え事をしていたので、気が付きませんでした」

東京都庁第一庁舎二階のロビーに居ながら、意識は時空

を昔へと遡っていたのだ。

「八八八。じゃあ、早速、展望室へ行きましょうか」

高速のエレベータは、一分も経たないうちに四五階へ私たちを運んだ。東京都庁の北タワー展望室は三百六十度の大パノラマを楽しむように設計されているようだ。

「塚本さん。ここへいらしたのは初めてですか」

彼が聞いた。

「現役時代に一度来た記憶があるけれど、良く覚えていないね。何しろ、以前にお話したように、しつちやかめっちゃかの時だったから」

全日本中小企業協会連合会などが主催した「阪神大震災復興、諸要求貫徹全国集会」に参加したあと、新宿のホテルに泊まり翌日の国会請願行動に備えた。

「閉まるまで時間があるから、都庁の展望室に行ってみなにか」

と他県の同僚たちに誘われて、新宿駅の西口から徒歩で都庁を目指した。巨大な無機質の威容を持つ建物に入り、エレベータで展望室へ。……そのあとのことは覚えていない。両脚に強い痛みを感じ、眩暈に襲われてしまったのだ。「そうですか。ぼくもね。仕事、仕事の毎日で、結局、新宿駅の西口で意識不明になって病院に運ばれ、一命を取り

留めたわけなんだけれど、嫌になっちゃいました」

八十年代の初頭、彼は大手の金融会社の課長として本社の人事で北日本へ赴任し、コンピュータを駆使した営業能力を発揮して大きな功績を上げた。最後は本社の法人部責任者まで昇進した男だ。私とは、北日本に在住している間に業務を通じて知り合い、家族ぐるみでスキーを楽しむなどの深い付き合いをし、退職後も交誼を絶やしていない。

「窓際に案内板がありますよ。……あんまり天気が良くて、目がちかちかするね」

「と、言い、ステッキで足のふらつきを調整しながら先を歩いて行く。手術で命が助かったものの、半身に麻痺が残り、歩行が思うようにならないようだ。」

「背中の中のショルダーバッグが重そうですね。私は腰がへなへなで靴一つでさえ、持つのが苦痛ですよ」

彼のショルダーには、愛用兼ボランティア活動用のノートパソコンが入っている。東日本大震災後、自身の震災体験から、都民が携帯用のパソコンなどを活用して、あらゆる場所で情報を得ることが出来るよう様々な方面へ働きかけているのだ。

「いやいや。どうってことないですよ。こんなの平気、平

気。毎日が面白くてしょうがないんだから」

麻痺している右肩からショルダーが、いまにも落っこちそうである。

「なるほどね。ものは考え次第か」

「この俺もそう考えて毎日を過ごしているのだ、と思つた。」

七

「塚本さん。向こうに見えるのが東京スカイツリーです。あれがNTTドコモタワー、六本木ヒルズがあれ」

と指さす先へ、新宿御苑と明治神宮の森も見えた。窓際に寄って案内板を読み、視線を動かす。眼下にオペラシティがあり、遠くに富士山と箱根、奥多摩と秩父の稜線が見えた。

「混み合わないうちに食事を摂りましょうか。展望レストランがあるから、そこへ。……塚本さん好物の、蕎麦はないだらうけれども」

ステッキの先を高級店の入り口のほうへ向ける。「肉と魚以外ならなんでも食べますよ。ジューズくらいはあるでしょう」

レストランに入ると、壁に「日本一予約の取れない店」というポスターが貼ってあつた。百席はあるうかと思

われる店内には、客が十人もいない。丸いテーブルと装飾を施した椅子の周囲にバルテノン神殿風の柱が十数本配置され、窓際にカウンターが設けられている。私たちはカウンターに並んで席を取った。

「ご注文が決まりましたら、お申しつけください」

と白いブラウスと紺のスボン、黒髪をきりりと短くまとめた目の涼やかな店員が、声をかけた。

「そつですね。お任せしますよ。この店で一番人気のあるランチにしますから」

「そつでございますか。お腹に負担のかからないミートソースセットではいかがでしょうか。お飲み物はコーヒー、紅茶、ジュースからお選びいただけます」

料金の高いステーキを薦めないところが心憎い。

「それで結構です。飲み物はコーヒー一つと、ジュースを一つ」

食事を摂ったあと、展望室からいったん二階に下りて、別のエレベータで二十五階の喫茶店に入り、ジュースとコーヒーを注文した。

「岸さん。こんちわ」

と店員が声をかけてきた。

「おう。元気にやっているか」

彼と店員は馴染みのようだ。

「何しろ、ここへ週に一、二度は来ているからね。職員との打ち合わせしてみたいなものもここでもやるわけ」

一瞬、昔に戻ったような錯覚を感じた。北日本で一緒に仕事をした時、彼と私はしょっちゅう会って打ち合わせしていた。営業するのはね、人よりも一歩も二歩も先を歩かないと駄目だ。人間関係をどう作るかが大事。でないといつどこで誰に裏切られるか分からないよ”というのが、彼の口癖であった。

「私には到底真似ができないな。ところで、非常階段つて、どこに有るんですか。二階のロビーに、それらしいものはなかったけれど」

と彼に尋ねた。

「あの立派な大理石の壁に、嵌め込まれているんですよ。誰も気が付いていないでしょうけれども、裏から開けられます。A、B、C、Dの四つの階段があるようですね。なぜ、外から見えないようになっていたのか、おかしいと思いますよ」

構造上に欠陥があるのではないかと危惧している様子だ。

「その辺を新しい知事には、徹底的に改革してもらいたい

ものですね」

医療法人の理事長から賄賂性を疑われている資金を借りた責任を取って知事が辞任した。新しい知事を選ぶ選挙で、元日弁連会長と元首相の二人を破って元厚生労働大臣であった人物が当選している。

「ほんと。上位下達ではなくて、下位上達でやってほしいよ。みんなやる気がない。震災時に帰宅困難者がたわけだからばくなんかは、ワイファイの設備を都内のあらゆる場所、つまり公共施設だけでなくコンビニやレストランにも作れと、言っているわけ」

ワイファイとは、ノートパソコンや携帯電話などの情報機器を操作して、電波を受信する装置のことだ。

「地震によって電車やバスがどうなっているか、帰宅困難者の受け入れ施設がどこにあるのかが、分かるようにしなきゃいけないわけ。東京メトロのマンタというソフトをダウンロードしていくと、交通機関の利用状況が瞬時にわかるわけ」

彼の弁舌は滑らかになっていく。

「岸さんの知識のお蔭で、私は、絶対絶命を回避したんですよ。……関東大震災に備えて、もっと頑張って長生きしてほしいな。東京オリンピックもあるしね」

北日本中小企業協会で起きた事件の件で相談した時、

「コンピューターの知識を誰よりも早く吸収して、細道捜査網の最新情報を絶えずファイルへ保存して置くようにするべきだ」とアドバイスしてくれたのは、岸だ。

彼は、日本がアジアに対して起こした侵略戦争の終焉を両親とともに中国東北部で迎えた。父は日本政府の高官だったが、中国人民に対する惨い迫害と、軍と政府の一部幹部による金銀財宝の略奪を目撃して嫌になり、職を辞した。命からがら日本へ戻った痛苦の体験があるのだ。

「例えて言うと、ホワイトアウト寸前でしたでしょう。でも、それは塚本さんの情け深く誠実な人柄が功を奏したんですよ。で、やられた金額はどれくらいでしたか」

笑っている顔の眼は真剣だ。

「かなりの金額でした。もしかして四億、特別な時期で十億を超したと思います。九月は、年金の掛け金を一括で納入する仕組みですからね。基金の十億は証券化してあったから、大丈夫だったと思いますが」

と答えた。資金を丸ごと強奪されたら、北日本中小企業協会は長い間、低迷していただろう。

「それは危なかったですね。ほんとにおかしい世の中だ。狂っているね。ほら、そこにも」

と言って、カウンターの丸椅子に座っているランニングシャツの男性の方を顎でしゃくった。両脚へトカゲのファッション・タートルを施した男は、赤いバンダナで頭をきりと縛り上げ、ブルーの短パンに黄のランニングシューズ、灰色のイヤホンを付けたままの恰好で血の滴るようなステーキを食べている。左手でスマートフォンを弄繰り回し、時折、嬌声を発しながら。

「あの方は普通ですよ。むしろ正直ですね。怖いのは、頭脳派です。ところで、病気の塩梅は、どうですか」

と尋ねた。

「主治医から七種類の薬を処方されているけれども、飲まないで行動しているわけ。足がびりびりと痛くてしょうがない。塚本さんは、どうですか」

喋りつかれた様子だ。

「私は、もう抗がん剤を服用する気がないね。死ぬまで、元気で活動したいから。……岸さん。また来ますから、それまで、お互いに頑張りましょうよ」

「えへへ。そう来なくっちゃあね。良かったよ。今日、こつして元気な顔が見られるなんて、予想も出来なかった。ぼくはね、こんど富山に出かけて履歴書を撮って来ようかなって考えているわけ」

それとも……」

彼の素ぶりにどこか引つかかるものを感じた。

「は、あ。あの……。色々事情が起きたんです。でも、みんな、ぼくが悪いのかもしれない。でも、でも……。あーあ、困ったなあ」

札束を自分の股の間に挟みながらハンドバックの中にある紙切れ類を手にとって一枚一枚調べた。銀行から送金した控えの中に北日本中小企業協会会員の氏名と送金額を示したものがあつた。その数は三件、百万円を超している。その他に自動車販売会社宛の送金があつた。

「会員に送ったお金は、なんのために」

横領したと思っていたお金の支出先が実は会員であることにほっとしながらも、正当な理由がなければ言いわけが立たないと考えたのだ。自動車販売会社への送金は、なにを意味しているのかそれも訊きたかつた。

「あ、はい。その、休業補償給付の送金です。きゅう、給付の、し、審査が遅れているので、と、取りあえず送りました。く、苦情がありません……」

彼は、両手を広げて左右に動かしながら釈明した。

「審査にかけていないものを送ったのか。それは拙いな。給付出来ないものだったら、取り返しがつかないだろう。」

と、彼は意味有り気に応える。  
都庁から新宿駅まで歩き、ビッグカメラへ行く予定の彼と別れた。

東京駅から、北日本に戻る新幹線へ乗り込んで窓外へ視線を送ったとき、隣の番線のホームに立っている男性を見て驚いた。篠村亮介に良く似ていたからだ。

「あいつは、いまだうしているだろうか」  
と想った。篠村は、事件の最後に思いがけないものを残してくれたからだ。記憶は、岸三郎と会って中断していた過去へと再び遡った。

「篠村君。このお金は君のもの。それとも小切手を振り出した時に横領した四百万円の一部ですか」

札束を取りだして篠村へ見せた。個人のお金にしては多いし、車中に置かれている自体がおかしいと思った。

「あ、あ。は、ハイ。そ、そのお金は、きょう、協会の、も、ものです」

何かを言いたくて彼は必死になりながら、疑問をかき消すかのように両手を開き左右に振った。

「協会のだって。じゃ残りはどこに行ったの。使ったの。」

で、自動車会社への送金は何の代金ですか」

真つ赤なスポーツカーの天井を見ながら訊いた。見たことも無いようなレザー張りの裝飾が施されている。

「そ、それは、ぼくの車代に当てました。ポ、ポーナスで穴埋めしようと思ったんです。でも、こ、これは横領と言われれば確かにそうです」

彼は、汗で濡れた髪を掻き揚げ眼鏡を手にとって指で拭いた。私は彼へ指示して車を発車させ郊外に向かった。自宅に行けばもっと多くの資料があると思ったのだ。

「つ、塚本専務副理事さん。ぼく、ぼく一人で部屋から、しよ、書類を持ってきますから、こ、ここで待っていて下さいよ。お、お願いです。つ、妻に迷惑をかけたくありません。妊娠七カ月ですから……」

彼が半泣きの顔の前で両手を合わせた。

「駄目だぞ。奥さんにはちょっと外出して貰えばいいんだ。君のやっていることは重大な犯罪なんだ。そこを許しては、問題が解決しない」

非情に突き放した。彼は唇を噛んだ。その姿に目もくれずにアパートの入口へと進んだ。陽の射さない建物の陰に雪が残っている。砂利やアスファルトの残渣が入り混じっている雪は、汚かった。



「わ、分りました。へ、部屋には入らないで、い、頂ければいいんですが」

最後の抵抗を示した。本人の承諾がなければ住居へ入ることは出来ない。部屋の入り口で歩を止めた。彼が部屋のドアをノックした。応答がない。郵便受けに数日間分の新聞やスーパリーの宣伝チラシなどが挟まっている。その新聞紙類を見て、また何か嘘をついているなど思った。

「いい加減にしてくれないか。中には誰も居ないんだろ」  
ノックを続ける彼の手首を抑えながら言った。

「あ、はい。で、では、か、鍵で開けるかなア」

ぶるぶる震える手でハンドバックから鍵を取りだすと鍵穴へ刺し込んだ。音がして鍵が開いた。開けられたドアの内側を見ると、床一面に郵便物や新聞紙、スーパリーの宣伝チラシが散らばっている。一陣の風が部屋の中に入って行った。その勢いでティッシュの紙片と一緒に綿埃のようなものがふわーっと戸外へ出た。

「書類は有るのか。君はここに住んでいないようだが。無印だったらどこにあるんだい」

中でせかせか動き回る篠村へ声をかけた。

「あ、はい。え、えーと。そ、そうですね。いま……」

返事は虚ろで心もとない。

「中へ入らせていただいても良いですか」

時間の無駄だと考えて奥へ向かって尋ねた。

「あ、はい。ど、どうぞ」

ドアの内部へ入ると、床一面にカップラーメンの殻やビニール袋、ティッシュがあちこちに散乱していた。強烈な香水の匂いとアロマの臭いが部屋いっぱいに充満している。大小の封筒が紫檀のテーブル上にあった。南に面した壁の一角に大型テレビと音響装置、豪華な机と皮張りの椅子があり、机上にはN通信社製のデスクトップ型のコンピューターが乗っている。サイドデスク上に青井と篠村、それに退職した紺野の三人が仲良く並んだ写真が額縁に入れられて立ててあり、その隣にコントラバスを弾いている彼の写真もあった。

彼は、一瞬困ったような表情を見せたあと視線を外し、机の抽斗へ手をかけた。衝立の後ろにあるダブルベッドの傍に綿埃と一緒に派手な色彩を施したグラビア雑誌とティッシュボックス、それにカップラーメンの殻の転がっているのを見て、不自然に思った。新婚夫婦の生活臭が感じられないのだ。

「その中には何にも無いんでしょ本当は。奥さんはどこへ行っているんですか」

妊娠中の篠村の妻が仕事にでも行っているのか。それとも、別の場所で暮らしているのか訊きたかった。

「そ、それは……。じ、実家と、ここを、い、行ったり来たりしているんですよ」

額の汗を拭きながら答える彼は、妙におどおどしている。

「悪いけれども、コンピューターを起動してくれないか。協会のデータが入っているかもしれないから」

了解を求めた。

「そ、それは……。し、仕方がないなあ。な、何もなければ……。あ、あるかも」

と応えて、電源ボタンを押した。IDとパスワードを入力してください、というメッセージが画面上に表示された。

「こ、これだけは、み、見ないでく、ください」

視線を外して、散乱している書類を眺めた。警察署から送られてきている文書を見て驚いた。スピード違反と免許証の不携帯運転で免許の処分を受けていたのだ。デスク脇の棚に、「北日本中小企業協会」のタイトルをつけたカセットテープとVHSテープ、ネットバンキングの専門書とパスポートがあった。

視線を戻すと、カリブ海を背景にした液晶画面に、イン

ターネットと電子メール、海外旅行のコマンドが表示されている。

「良ければ、電子メールを開いてください」

「は、はい。塚本さんは、コンピューターの操作が出来るんですか。……もう終わりだなあ。あーあ」

と彼が呟いた。

メールの一覧にN通信社のプログラマーと、青井からの名前があった。

「N通信社と青井さんからの文には、何が書かれているんですか」

本人が同意しなければ、読むことが出来ない。

「こ、こんなことは、し、したくなかったんですよ。も、もう、み、みんな読んでください。ほ、本当は、つ、塚本専務副理事さんに助けてもらいたかったのですよ」

細道捜査網の開発に絡んだ賄賂性の疑いが濃い二人のメールの文章を読んだ後、ポケットからFDを取り出して証拠をダウンロードさせ、録音・録画のテープも借りた。

「じゃあ。事務室に帰るぞ。そのバッグは、私が預かるからね」

そう告げてドアの外へ出た。雨は小降りになっている。間を置いてドアの開める音が聴こえた。篠村は、溜まって

いた悩みを吐き出した所為ですつきりしたらしく、落ち着いた表情でスポーツカーを運転した。彼の背広のポケットで携帯電話のブザーがしきりと鳴っている。

彼へ、

「電子メールをファイルした件などは、青井なんかへ言っ  
ては駄目ですよ。貴方の罪が減刑されなくなるからね。こ  
れから、理事長のところへ行ってくるから、先に帰って資  
料を準備しててください」

と指示した。

理事長へ、調べた事実を報告し事務室へ戻った。青井へ  
状況を報告すると、彼女は、急ぎの私用があるから先に済  
ませてくると言って、

「塚本さん。戻るまでにしつかり財務資料を点検して置い  
て下さい。だってね、あなたが支出の決済をしていたんで  
すから、同罪よ」

と出がけに捨て台詞を吐いた。

「ここへ来ても偉ぶるのは止めなさい。まともに仕事をし  
ないでいながら、部下の不始末を他人のせいにするなんて  
無責任の極みですよ」

青井を小さな声ながら厳しく叱った。事務室の職員たち

が、吃驚した表情で私たちのやり取りを聞いている。彼女は、唇をぶるぶる震わせながらぶつくさと文句を言い、鰐柄のバックと携帯電話をつかみ事務室を出ていった。

「篠村君。今日は、徹夜を覚悟しておくように。奥さんにも伝えておきなさい」

そう指示して、机の上に溜まっている未決書類を決裁し  
資金繰りや起業相談の問い合わせに応えた。

「お先に失礼します」

と挨拶して、定時に職員が退勤した。

夜遅くなって青井が、事務室に戻るなり、

「解ったよ。数字のマジックが」

自慢げに叫んだ。

「……」

篠村は沈黙したままで、私は彼女の顔を冷ややかに眺め  
るだけだ。

「貴方は、塚本さんに決済してもらったときは、小切手の耳  
へ100万円と書いた。割り印させて、そのあと1を4に、  
そして4を8に書き換えた。そうだね」

得意げに、私と篠村の顔を交互に見ている。

「……あ、はい。……その通りです」

彼が、苦笑しつつあっさり認める。

「割り印を押しした塚本さんが所用で目を話した際に、小切  
手の刻印欄へ押印したのね。小切手には、刻印機で八百万  
と記した」

「どうだ、と言わんばかりだ。」

「あ、はい」

素直に認めて、彼は視線を床に落とす。

「えっ、私の席に来て、実印を使用したのか」

半信半疑を装った。

「馬鹿ねえ。塚本さんは、お人よしだから。ワープロの操  
作は上級だけど、コンピューターは初級で、そんなことも  
気がつかないのねえ。オホホホ」

と彼女は、全ての罪を篠村へ着せようとする。

「もう、うそをつくのは終りにしてください。ぼくは、何  
もかも、塚本専務副理事さんへ、全部証言しました。青井  
専務理事とN通信のプログラマーとのやり取り録音もして  
残していただきます」

突然、床から視線を上げた篠村が、堰を切ったようにぶ  
ちまけると、立ち上がって青井を睨んだ。

「ひえっ。な、何イ。証言……、録音……。てめえ裏切っ  
たな。この糞馬鹿野郎が。あれほどかはってやったのに  
イ」

「これは理事長の命令です。副理事長も全員、同じ考えで  
すから、調査に従うように。私も専務には、さんざん目に  
に遭われました」

「財務局長が指示した。」

「篠村君。ソファの方へ運んで資料を出して見せるように。  
理事長さま方は、向こうでお待ちください。青井さんも、  
すぐにごうそ」

私は、篠村のサイドデスクの上の箱を指さし、理事長

黄ばんだ歯を剥き出して引きつり、狂ったように叫んだ。

「未収金問題を隠匿させ、N通信の請求を倍加させ、大田  
さんに恥をかかせた。免停になったばかりを、首にしないか  
ら、いずれ、海外に出て協会の資金を奪えと脅迫したのは  
貴女ですよ」

その時、ドアをノックする音がした。

「青井さん。腰を抜かしますよ。通信の記録などを裏付け  
る証拠を、理事長立ち合いのもとで、これから探しますか  
らね」

「思わぬ篠村の離反に驚愕している青井へ、追撃の一言を  
浴びせた。」

理事長が、財務局長と二人で事務室へ入って行ってき  
た。

「これは理事長の命令です。副理事長も全員、同じ考えで  
すから、調査に従うように。私も専務には、さんざん目に  
に遭われました」

「財務局長が指示した。」

「篠村君。ソファの方へ運んで資料を出して見せるように。  
理事長さま方は、向こうでお待ちください。青井さんも、  
すぐにごうそ」

私は、篠村のサイドデスクの上の箱を指さし、理事長

黄ばんだ歯を剥き出して引きつり、狂ったように叫んだ。

「未収金問題を隠匿させ、N通信の請求を倍加させ、大田  
さんに恥をかかせた。免停になったばかりを、首にしないか  
ら、いずれ、海外に出て協会の資金を奪えと脅迫したのは  
貴女ですよ」

その時、ドアをノックする音がした。

「青井さん。腰を抜かしますよ。通信の記録などを裏付け  
る証拠を、理事長立ち合いのもとで、これから探しますか  
らね」

「思わぬ篠村の離反に驚愕している青井へ、追撃の一言を  
浴びせた。」

理事長が、財務局長と二人で事務室へ入って行ってき  
た。

「これは理事長の命令です。副理事長も全員、同じ考えで  
すから、調査に従うように。私も専務には、さんざん目に  
に遭われました」

「財務局長が指示した。」

「篠村君。ソファの方へ運んで資料を出して見せるように。  
理事長さま方は、向こうでお待ちください。青井さんも、  
すぐにごうそ」

私は、篠村のサイドデスクの上の箱を指さし、理事長

と財務局長を応接コーナーへ案内した。青井が、渋顔で着いてきた。

箱の中から、中身の抜き取られている役員宛の現金書留封筒と篠村が提出した青井宛の嘆願書と退職願、篠村宛に青井が書いた回答と遺留の手紙、過去三年分の未収金書類二千数百点、審査未了の所得補償給付金請求書五十件、青井が自分の手で出勤カードを偽造した現物三十点、N通信のプログラマーから振り込まれた現金の出し入れを記録した預金通帳、青井が書いたネットバンキングのIDとパスワードの指示書などが出てきた。

「私たちはね。貴女の専務理事就任時から、ずっと疑っていました。遅まきながら、塚本専務副理事から受け取ったファイルの検証もやっと終わりましたね」

と切り出して、財務局長が理事長の指導の下で、副理事長と一緒に事態を慎重に調査してきた経緯を語った。

「こ、これは、みんな塚本さんの罠ですよ。だ、だまされてはいけません」

と彼女は、往生際が悪い。

「篠村君がね。貴女から電話で受けた不正経理の指示と、脅迫の音声を全部録音してあるんですよ。テープを聞いたら、塚本専務副理事のロッカーへ現金を入れておくと、

言っているじゃないですか。なんでしたら、証拠の音声を聴きますか」

財務局長が、テープをテーブルの上へ載せた。

「そんな物は、簡単に偽造できます。専務理事の私を信用してください」

突然、青井がサンダルを脱いで 土下座しておんおんと泣き出した。

「時には、ビルの十階に借りている倉庫へ寝ながら、篠村君へあれこれと指示していたそうですね。塚本君宅の敷地に入って、藁人形を釘でライラックの幹へ打ち込んでいる貴女の映像もありますよ」

傍らで静かに聞いていた理事長が、ビデオテープを取り出して、その横へ置いた。

青井の波打つ肩を見ているのが忍びなくて、視線を窓外に送った。ビルとビルの間紺碧の空を、北上する白鳥の弧が二重ガラスを通して映った。